始

276-265

高島平三郎校閲
尼子止
齋藤榮治 共著

學校體育の根本的改造

東京 隆文館藏版

大正
9.7.23
内交

序

我が學校教育の現狀を一瞥するに、未だ、兒童生活の如何を顧みるなく、況んや個性に應ずる何等の用意もなく、十年一日の如く歐米の後塵を嘗むるの憾がある。今や强國の列に加はる吾が日本としては、文物共に內に自ら發動を期すべきの秋である。國家の盛衰は一つに國民教育の振否にある。而かも其の根本をなすものは國民健康の如何にある。國民體育が國民教育の基礎たるべき理由は實に茲に存する。然るに吾が國民教育者中、此に意を致すもの尠なく、徒に枝葉に流れ、形式に捉へらるゝもの〻多きを見るは、眞に國家の爲に痛嘆すべきである。將來の國民教育は、飽くまでも體育を根本として、着實なる發展を計らなければならぬ。然らざれば教育の徹底は期することは出來ぬ。

曩に、體操及遊戲集成の編述を企て、二千餘頁の大著を完成せる尼子君は、同好齋藤君と共に、學校體育の改造を叫びて、今正に本書を成すに至つた。閲

讀するに、こは主として、體育改造に關する概論的のものである。然かし、其の據る所、今日の進歩せる心理學生理學を經とし、實驗を緯としたる、實に斯界有數の著述たることを證すべきである。後日一般に渡りて、其が實行の手段と方法とを明かにするの時、益々本書の肯綮すべきものあるを信ずる。

尼子、齋藤、兩君共に、余が親近の門下生として、永く教育界に身を投ずるの士、殊に體育を基礎とする教育の研究に至りては、特に專門的見解に秀でたる所あるを信ずる。版成るに及び本書を斯界に推薦するを得たる、余も亦同慶の悅を感じて、玆に一言の序を草した次第である。

大正九年六月二十五日

高島平三郎識

序

高島先生指導の下に、體操及遊戯集成を大成して玆に滿二年、二書共に數版を重ねて、吾が教育界に迎へられしは、余の最も光榮とする所である。而かも前二書は、體育の理論と實際とを論述せるものなるも、主として、體操及遊戯の原理を探究し、加ふるに、最近内外に行はるゝ所の技術及其の方法に重きを置いたものである。隨つて、讀者は各々自己の批判に依りて、これが取捨選擇を行はれしことゝ思ふ。其の影響か否かは知ることは出來ぬけれど、近來教育行政當局に於ても、從來發表の體操要目なるものに重きを置かず、當分は自由研究に任ずるを可とす、といふに至つたさうである。余輩の淺見は、幸にして其の先見なりしことを喜ぶものである。然かしながら自由放任は不可である。現代體育の基礎となるべき、心理、生理等の科學は長足の進歩をなして居る。而かも斯界に身を投ずるの士も、亦大に、自覺的、系統的、構成的、見識を養

つて來た。今は次第に改革建設の時期である。余輩亦これが改造の愚見を有する。時に高島同門の畏友齋藤榮治君、亦余と其の志を同じうするの士、これが改造に就き、知識の交換、記述の論難、數回十數回、互に意見を戰はして、考慮研究したるもの、纏つて一綴を成した。卽ち本書は余等兄弟が現代體育改造の第一聲である。版成るに及びて、高島先生の一閲を仰ぎ、玆に公表して、以て斯界の革新を促がし、同好の參考に供し、大方の批正を乞はんと欲する次第である。

大正九年六月二十五日

尼子止識

序

我が邦の學校體育が、今日如何なる狀態にあるかを觀るに、學校體育と學校體操との概念上の混同から、種々雜多の混亂を來して居る。故に、吾人は、先づ、此の二つの概念を明かにし、學校體育は學校體操を中心とし、而かも、其の體操の意義は、徹頭徹尾敎育的意義と一致するものでなくてはならぬ。從つて、其の體操を組織するには、最小限度として、心理的基礎、生理的基礎、實際的基礎の三方面を認めて考察を進め、結局、體操の目的は人格の完成にあるものなることを本則として、これが徹底的研究と、根本的改造とを促さんと欲するものである。現今の所謂學校體育を案ずるの士、殊にそが專門の職に在るの敎育者に對しては、特に本書を提出して、忌憚なき批評を需めんとする次第である。請ふ讀者諸君幸に吾等の意のある所を掬せられんことを。

大正九年六月二十五日

著者等しるす

學校體育の根本的改造　目次

第一章　總論

第一節　我が邦學校體育の現狀……一
第二節　學校體育改造の必要……四
第三節　學校體育改造の態度……五

第二章　本論

第一節　學校體操の意義……一
1. 技術論の立脚地より
2. 純粹理論的見地より
心身關係論――「想錯誤の根元――心身關係論の轉換――生物學的見地より――社會學的見地より――人格的見地より――

第二節　學校體操と學校體育……五三
第三節　學校體育の區分……六二
第四節　學校體操の目的論……六七
科學的目的觀と統合的目的觀――統合的目的觀の出發點――道德意識發達過程に對する見解――系統發生的――個體發生的――
第五節　自己中心的目的……七六
人間性の問題――自覺を催ぜ――自覺の徹底――
第六節　家族的目的……八五
家族一團としての滿足――家族制度の廢滅と家族精神の勃興――內部的自覺の促進
第七節　國家的目的……九四
忠良の臣――至尊の御仁德――國民生活の自覺――デモクラシー――個人對國家の關係――健康保護と生命保護――
第八節　社會的目的……一二
社會の意義――社會の起ル――社會の發達――社會文化と學校教育の文化――學校教育文化の本質――學校教育文化と陶冶――
第九節　自然的目的……一三
自然と人――自然觀――自然に對する人間の位置――如何なる態度を以つて學童に接すべきか――師道の本領――
第十節　學校體操方法論の概括……一五〇
研究的態度の問題――見解を擴大せよ――何れの點より着手すべきか――
第十一節　精神的發達より觀たる基礎……一六一
自我に對する見解――自我構成――對する見解――自我の發達に對する見解――自己評價の發達――自己評價の發達と學校體操――兒童の活動性――兒童活動力の綜合的模諦――活動と習慣――活動と意志の習練――自驗自證の態度――小學校時代の特徴（直觀作用）――（情作用）――

（意志作用）——

第十二節　身體的發達より觀たる基礎……二二四

身體發達の意義——身體の發達事實——兒童期の區分——身體各部の成長——身體各部の發達と年齢——運動經濟の原理——骨の發達——（脚）——（足）——（胸）——（腹）——（骨の成業的發達）——（脊柱）——（脊柱の機能）——（脊柱の側屈感識）——（脊柱側屈の豫防法）——（胸廓）——（胸廓の形狀）——（胸廓及び胸圍の測定法）——（胸廓計）——（呼吸時に於ける胸圍の變化）——筋肉の發達——內臟諸機關の發達——（心臟及び血管の發達）——（血液）——（肺臟の發達）——（運動と呼吸）——（負擔量と呼吸）——（運動と呼吸の疲勞）——（呼吸器練習の必要）——（呼吸器練習の目的）——（呼吸器練習の實案）——（急速運動と生理一般）——皮膚及び內部機關の發達——（皮膚の表面）——（內臟粘膜）——（肝臟）——（唾腺）——（膵臟）——（脾臟）——（皮膚の脂腺）——（發汗）——腸管の發達——（フレビツム氏說）——（シヤクソン氏說）——（カエス氏說）——

第十三節　實際的基礎……三〇八

身長及び體重と營養との關係——體軀の大小と心意力との關係——成長及び教育の時期——年齢と疾病——異常的身體狀態——正常なるものとしての頸部運動に關するもの——（頸部運動に關するもの）——（軀幹運動に關するもの）——（肩胛運動に關するもの）——（下肢運動に關するもの）——運動失調——（運動失調の起る生理的要件）——（運動失調の觀察）——特殊感覺——（視覺と運動感覺）——（聽覺と運動感覺）——（意志の發動命令）——（筋感覺）——（皮膚感覺）——（感覺機能測の必要）——（視覺測定）——（聽覺測定）——（疲勞の問題）——（筋肉の疲勞と精神疲勞）——（精神作業に基く疲勞）——（疲勞の測定）——（疲勞狀態の過程）——（疲勞と疲勞の感）

第三章　結論

第一節　學校體育の中心問題……三六二

第二節　學校體育と社會體育……三六三

第三節　國民性と體育法……三六五
第四節　體育奬勵法……三六九
第五節　本書內容要約言……三七一

目次終

學校體育の根本的改造

高島平三郎校閲
尼子止
齋藤榮治共著

第一章　總論

第一節　我が邦學校體育の現狀

學校體育と一口に云つてしまへば、極めて、簡單であつて、しかも、解りきつた事柄のやうではあるが、しかし、此の問題を細密に考ふれば考ふる程、關係する範圍も廣くなるし、又、研究の程度からしても殆んど限りがない程、深遠なる意味が現はれて來る。假りに、常識によつて、我が邦現時の學校體育の狀態を瞥見すれば、學校體育のすべては、學校體操によつて代表してゐるやう

にしか思はれない。其の證據には、學校内部に、兒童の體育に關する施設としては、體操器具の類ばかりで、其の他、何等の施設もないのは我が邦一般の現狀である。成る程、學校體操は、學校體育の主要なるもの、否、中心となるべきものには相違なからうが、しかし、體操ばかりを以つて、學校體育の全般を盡し得るものとするのは、果して如何なるものであらうか、茲には、少しく、研究討議を凝らさなくてはならぬ。是に於いて、吾人は、以下少しく我が邦に於いて、學校體操を必修科として設けられてから今日に至る迄、如何なる狀態にあつたかと云ふことを極めて、簡單に、其の梗概だけを述べて、學校の體育は單に、學校體操ばかりでは、其の眞目的を到達する上について、聊か、足りない處があることを示唆して、更に、本論に於いて稍々細密に論究したいと思ふ。

抑、我が邦に於いて、學校體操を制定し、國民の體位を高めやうと企てゝからは、可なり、長い間の歷史を持つて居る。處で、斯の歷史につれて、國民の體位が、どれだけ改造されたか、將又、どれだけ向上せしめられたかを一瞥するに、左程、著しい功績は認められないやうに思はれる。尤も、敢て、無價値だとは云はないが、國民の體位を高めると云ふ見地からすれば、其の功績が比較的微々たるものゝやうにしか思はれない。

成る程、學校體操は、學校教育と云ふ範圍内にある仕事であるから、單に、身體の問題ばかりでなく、精神的要素を加味すべき性質のものであるとは云ふ迄もないが、それにしても、國民生活を營爲する各人の體位には、今少し其の影響を與ふべき筈である。蘇つて、精神的方面の影響を見るに、これ又、何等、其の特徴を擧ぐることは出來ない。學校體操を實際に施行する其の主義方針としては、其の目的論に於いても、方法論に於いても、實に立派なる議論の下に施行されて居るやうだが、其の實績に於いては、身體的方面にしても、亦、精神的方面にしても、叙上の如く、其の功績微々たる所以のものは、其の原因、果して、那邊に伏在して居るかといふことは、大に考究する必要を認むるのである。

第二節　學校體育改造の必要

前述の如く、學校體操は既に施行せられ、殊に、近頃になつて、益々、盛んになる傾向が現はれて居るが、今日迄の歴史によつて考ふれば、今後の學校體操も、過去のそれと同樣にあまり實績を提供することは出來ないではなからうかと思はれる。何故かと云ふに、第一に、學校體操に對しては、合理的根據を缺いて居る。第二には、實際的根據をも缺いて居る。兎に角、教育的事實として取り扱ふ性質の仕事に對して、何等の根據もないと云ふことは、實績の擧らぬ根本の理由となるのである。尤も、先年文部省より發表した、彼の體操要目の如きは、大體の目標を示したに相違ないけれども、學校體操を施すべき理由や根據には一言も論及して居ない。要するに、學校體操の概念は頗る空寞であつて、教育的事實としては、實に應はしくないやうな思ひを起すのである。是に於いて、一面には、どうしても、學校體操と云ふものは、斯くの如きものであるぞと云ふ、確實なる概念を形成する必要もあるし、又、他の方面からは、學校體育とは、如何なる事柄であるかと云ふことを考へて、二者、緊密に結合せしめ、理論的にも、實際的にも、聊か、不都合のないやうに組織しなければならぬ機運が到來したのである。斯くの如きは、唯に、學校體操の發展の上から要求されるのみでなく、我が邦の國民生活の上から、必然的に要求せられつゝある事實上の問題である。

第三節　學校體育改造の態度

「學校體育を革新するには、先づ、其の態度が大切である。人は、動ゝともすれば、自分の趣味や嗜好に投じた方面ばかり主張して、他の方面は全然閑却するやうになり易い傾向を持つて居る。斯くの如き態度であつたならば、よしや、簡單なる仕事であつても、到底價値ある革新の事業を仕遂げる事は出來ないのである。學校體育とは少しく問題が違ふが、しかし、關聯する問題に對して、叙上の如く偏頗なる態度で革新を企てゝ居る人も可なり多い。これ等の人々の仕事の結果を見ると、必ず、惡弊を殘して居るが、其の惡弊は、主張する本人

には少しも氣づかず、却つて、特徴であるかのやうに考へて居る。尤も、斯くの如き主張を一個人として宣傳するならば、社會的に、制裁を加へられるけれども、一の社會的地位を背景にして居る場合は、存外、社會の實際方面には勢力を得るものである。是に於いて、公明正大なる見地に立脚し、學校體育を革新しようとするならば、先づ、學校體育其のものゝ事實を觀察し、しかも、其の眞相を洞破し、他の一面に於いては、現代に於ける、我が邦の國民生活より要求せらるゝ點を組織的に構成して、其の要求に應ずることによつて、始めて、學校體育に生氣を生じ、其の結果、社會的體育上の革新に對しても、陰に陽に、貢獻するやうになるのである、從つて、身體的にも、亦、精神的にも、實績を見ることが出來るのである。」

第二章　本論

第一節　學校體操の意義

十人十種であるとは、强ち、お互の顏貌ばかりではない。お互の顏貌が異なると同樣に、その內面的生活を形成する精神活動に於いても、亦、各々、異なる特徴を持つて居る。其れ故に、學問上の研究についても、同一の研究對象に對して、種々雜多の議論が現はれ、甲論乙駁殆んど絕ゆることないのである。

學校體操の如きも、或る人は啻に手や足を動かし、一、二、一、二、とやつて居ればそれで學校體操の能事終れりと考へて居るものもある。又、或る者は、頗る窮屈に考へて、科學的基礎を求めようとか、或は、哲學的根據の上に建設しようとか云ふやうに、眞面目に研究の步を進めて居るものもある。人々によりて、區々の研究をして居るから、從つて、其の研究から割り出された具體的方法も、實に千差萬別であつて、其の多數の方法中、何れが上乘のものである

か、換言すれば、何れが合理的根據を有するものであるか、容易に理解し得難い。この點から見ると我が邦の學校體操は、實に迷夢を彷徨して居ると云ふても過言ではない。」

先年文部省にて發表した、學校體操要目は、この合理的根據を如何なる程度迄說明して居るだらうか、兎に角、責任ある文部當局が發表したものであるから、我が邦の學校體操を研究する場合には、大に參照しなくてはならぬのであるけれど、如何に吟味した處が、合理的根據は得られないのである。要目編成の方針が、假りに、具體案の標準だけを示したものだとすれば、何故に、其の標準となるべき理由を闡明にしないのであるか、それには種々なる理由あるとしても、權威あるものとして發表した要目ならば、如何なる點から觀察しても、不完全なものであることは免れない。處が、斯くの如き、不完全なものを、實際教育者は、是非の批判を顧ることなく、彼の要目を實地に施行しさへすれば、それで、學校體操、延いては、學校體育は、實に十全のものゝやうに考へて居る。加之、是れを指導する任にある人でさへも、要目萬能を唱導し、更に他を顧慮することを知らぬ今日の狀態であるから、學校體操、延いては、學校體育の狀況如何は、實に思ひ半に過ぎるのである。

技術主上論者の立脚地より……この見地は、遂ひ近頃迄持て囃され、學校の體操、學校の體育と云へば、體操の技術、乃至は、體育の手業が上手に仕揚げることを以つて、學校體操や學校體育の全部であるかのやうに考へられて居つたのである。これ卽ち、ミーンスとエンドとを取り違へて考へた結果である。この結果に伴ふ學校の體操や體育法と云ふものは、口にこそ、體操と訓練とは密接不離の關係があるとか、車の兩輪であるとか、立派な言を竝べ立てゝも、其の實際を見ると、精神的訓練には、一指をも觸れ得なかつたのである。

技術主上論者の見解は多くの場合、教育的事實と提携し難いと云ふことが、一般識者の間に認められて、以來、漸次他の見解を求むるやうになつては來たけれども、それは、斯の道を多少詳しく研究し、眞味に考へる人にとつて覺醒

されたと云ふだけのことで、實際教育の一般に於いては、未だ、技術主上を唱導して居るものも、決して尠くはない。或る地方の如きは、尋常一學年より兵式教練を課して、殆んど軍隊式に練習した結果、實際上の技術は、實に美事に出來たと云ふが、偖て兒童の身體發育律や、健康狀態を調査して見ると却つて、不良の成績であつたと云ふことが事實上現はれて居る。又、身體的方面ばりでなく、精神的の方面としても、教練としての動作に伴ふ精神活動は、運動に相當して働きもするが、それは、嚴格なる號令に拘束されて働くのだから、其の時其の場限りで、他に、自由の境地にある時の遊び振りやすべての所作を見ても、決して、他の兒童より優れて居るとは思はれないのみならず、學校に於いて、あまりに拘束されて居るから其の反動として、却つて、自由放慢に流れ、自制的精神を缺くやうな傾向が著しく現はれて居るのである。この點から見ても、技術主上論者の立場は、非常に偏頗であつて、教育的意味と逆行し、兒童體育と背理するやうな事實となつて現はれるのである。

更に、他の觀察點から見れば、技術主上論の立場にあるものは、多くの場合、學校體操や、學校體育の何たるかを理解しないものが多いから、從つて、形式的なる法令に拘泥し、或は、要目に捕はれ、其の精神のある處を充分に理解し、眞髓を捕捉して活用すると云ふ點が缺けて居るから、或る種の運動を授けるにしても、頗る單調であつて、しかも、同じリズムで、繰り返し繰り返しやるのだから、活動力の旺盛なる兒童にとつては、實に堪へ難い苦痛であつて、恰度、懲罰でも加へられるやうな感じを以つて居るのである。しかしながら、教授者の側から云へば、或る種の運動を授けると云ふのは、運動其のものだけを見て居るので、運動は方法で、更に、統一する處の終局目的を考へないのであるから、一旦授けようと仕組んだ運動の技が、正確に、しかも敏捷に、理想狀態に到達する迄、執拗に强ふるのが當然の要求である。實に執拗の程度と成功の程度とが正比例するやうな場合に立ち到るのである。斯くの如きは、技術主上論者の陷り易き大なる缺點であつて、兒童教育の見地から見ても、亦單に、兒童身

體の發育を促進せしむる體育と云ふ立場から考へても、恐るべき缺陷を齎らすものである。

更に、一言附加して置きたいことは、技術を重寶がる場合は、兒童の內面的努力、卽ち、兒童が熱心になるといふ精神を度外するやうになる。如何に熱心にやつた處が、其の兒童の體質や或は構造によつて、容易に、巧なる技術を現はすことの出來ない場合が澤山ある。又、それと反對に、生來其の體のつくりが技術を表現するに相應して居れば、左程の苦心や努力もせずに優等の出來榮えを現はすのである。斯くの如き、兩樣の事實を取り扱ふ場合に、技術主上論者は、內面的努力を無視して、技術の巧拙だけに是非の標準を認むるのである。大人でさへも、第三者から、自分の所業を是非の批判される時に偏頗な見方をされると非常に不快に思ふのであるが、況して、幼稚なる兒童を取り扱ふのであるから、單に外形の事柄ばかりでなしに、內面的努力を大に認め、其處に敎育的意味を加へて是非の批判を判定しなくてはならぬ。處が、この點は、存外輕じられて居るから、敎授者も、兒童の內的努力等を考へようともしないし、又、兒童の方でも、體操と云ふものは、かう云ふものだと觀念して居る傾向も見える。要するに、技術主上論者の缺點は、數々あるが、身體的發達を促す點から見ても、亦、敎育的見地から考へても、非常に缺點が多いので、技術だけを以つて、學校體操のすべてであると云ふことは云ひ得ないのである。

而しながら、學校體操は、空理空論でないかぎり、技術を全然無視することは出來ない。換言すれば、學校體操の本領は運動によつて、兒童心身の發達を促進せしむる處にあるから、其の運動の方法が生理自然の法則に一致し、心理的自發性に基くものでありさへすれば、技術より來る處の弊害は考へられないのである。是に於いて今少しく、運動或は技術と云ふ用語の意義を明かにして、兩者の關係を說明してみようと思ふ。運動は云ふ迄もなく、甲の點から乙の點迄移行する空間的經過を云ふのであるが、其の場合、吾々の運動狀態は如何樣にも現はすことが出來る。假令、極めて素朴的に甲點から乙點迄移行せしむるこ

とも出來るし、又、藝術的にも移行せしむることが出來る。吾人の所謂、技術なる用語の意味は、運動を修飾した狀態であつて、運動其のものを素朴的に發表しないで一種の技巧を加へたものを意味するのである。其れ故に吾人の所謂、技術なる語は、Technique と云ふことになる。處が、斯う云ふ意味の技術を內面から見れば、卽ち、兒童心身の發達關係を中心としなければならぬのであるから、格別弊害もないが、今日我が邦に行はれて居る技術主上論者は、運動と技術との關係を吟味することなく、無意味に結合させ、且つ又、技術其のものを內觀して方法を講ずると云ふことが全然度外されて居る。けれども、吾人は技術主上論者の考への足りない處につけ加へるだけであつて、技術其のものを全然否定するものではない。若しも、技術主上論者の考へを內面的に轉換して、技巧を施す其の要點は、すべて兒童心身の發達階段に相應するものを選定するとすれば、兒童の自然性から現はるゝ運動其のものに對して、少しも、無理な處はないのであるから、如何に技術を尊重しても弊害は伴はない。吾人は、斯くの如き意味に於いて、技術をも、認めるのであるが、しかし、今行日、はれて居る、技術主上論を唱導するものは、內面的努力を無視し、表面的技巧の優逸なるを欲するから、其處には、矯正の意味も、將又、鍛練的意味も見出し得ないことになる。況して、彼れ等、技術主上論の立場から、一種特別なる方面に意味を見出して、訓練的意味と提携せしめようと企てゝ居る。

以爲らく、吾人人類の肉體的存在を保持するためには、玆に、當然、生活すると云ふ事實を認めなければならぬ。この生活事實を許すならば、其の生活を持續するために各人の職業が認容されなくてはならぬ。其の職業を遂行するためには、吾々の身體的諸機關を相當に發達せしむる處の豫備的練習、乃至は鍛練的練習が自ら必要となる。この必要に應ずるのが、卽ち、技術を尊重する所以であると結論して居る。斯くの如き見解は、一應、道理のある議論のやうにも考へられるが、假りに、職業の準備練習だとすれば、兒童の內面的生活や、心身の發達過程を無視しても差し支へはないのであるか、更に、一步を進めて、

兒童の發達過程を無視して、授ける處の手業は、それが、果して、將來に於ける職業の準備的練習の意味を全うすることが出來るか、忌憚なく言へば、苟も、學校教育の一教科として授ける處の學校體操は、年期奉公の小僧と同一視すべきものではない。職業的準備の意味は、彼れ等の云ふが如き形式的のものではなくして、兒童の內面的生活の可能性を涵養し、其の可能性が、職業に從事する場合、善良なる力となつて現はれると云ふ意味に於いて始めて、教育的になるのである。是に於いて、最早、技術主上論者の立場は殆んど無價値のものとなつたのであるが、しかし、今日迄、以上の如き意味を以つて教育された、多數の兒童は、學校體操、或は、學校體育と云ふものは、全然、形式的で、しかも、强制的で、懲罰的のものだと承知して居るから、最近に於いて、學校體操に興味を興へよと絕叫されるやうになつたのも、畢竟、叙上の如き皮想の見解から導かれたものと思ふ。

最近に於いて、生きた實例を得て居るから玆に示して、現代我が邦學校體操乃至は學校體育は如何なる理解の下にやつて居るかを實證してみよう。

著者は一夕散步の途次、本鄉駒込通りに於て、尋常三四年位の男の兒が五六人共に遊んで居るのを見た。其の中の一人、僕の家は貧乏だから、「僕は俥夫になるんだ、だから、體操を、うんとやつて、駈けつこが上手にならなければならない」斯う云ふ話しが、彼れ等仲間の間に交換されて居た。最も、行きがかりに聞いた話しであつたから、前後のつづきは明瞭しなかつたのであるが、兎に角さう云ふた。彼は、すべての樣子から見ても、眞面目な考へで云ふたのであつた。其處に、居合した他の子供は、「なんだ、俥夫になつてたまるものか」と打ち消したが、それには、何等の反論もなく、單にそれだけの話しが、彼等の間に交換されて居つた。著者はしばらく立止つて樣子を見て居つたが、「俥夫になつてたまるものかと否定した其の言葉の內容は、俥夫としての職業を否定したので、敢て體操の目的を否定したのではないと觀察した。

單に是れだけの事實によつて我が邦一般の大勢を斷言するのは、頗る獨斷で

はあるが、しかし、子供が、遊び三昧の折りでも、自分の考へを知らず識らずに發表すると云ふのは、其の反面に於いて、學校教育の實情を實證するものと見ても強ち不當ではないと思つたから、色々考へて見たが、要するに、彼の子供の對話は二樣に考へられた。卽ち、學校教育の實際が、頗る徹底して居る。學校教育は須く斯くあるべしだと考へた。例令、俥夫であらうが、屠屋であらうが、自分の職業を中心として、日常の勉强を統一して行くのは、實に、賴母敷ものであると考へた。しかし、他の一面から考へると、其の子供は、自分の家の貧乏なることゝ、俥夫の貧乏なる生活とを結合し、次に、俥夫は、駈けるのが商賣で、體操は、駈けるだけだと云ふ考へとを結びつけて、自分の覺悟をきめたに過ぎないので、俥夫の職業其のものについて、駈けるより外に何等の考へを持たぬのである。斯くの如き心理的過程から形成された、其の子供の心中は、實に悲痛を感じて居るに相違ない。又、其の子供の體操演習中の駈け歩きは、確かに、一種の悲劇であると、痛切に同情した次第である。

今日の技術を楯にする體操教師乃至は、體操の目的を職業の準備と云ふことに定置する體操教師は、技術其のものを尊重しても、其の內面を考へ、又、職業準備を目的とするにしても、所作其のものより一歩進んで、職業其のものゝ眞理なることを理解せしめ、自己の職業を全うするについて缺くべからざる主要點を兒童に、充分理解せしむるならば、技術を尊重しやうが、職業準備としやうが、其の終局目的には少しも差し支へないのみならず教育的意味をも見出されるが、技術主上論者が、一度、態度を玆に轉換すれば、自己の立場を放棄しなければならぬことになる。是に於いて、學校體操の眞意義は、技術主上論者の立脚地よりは到底見出し得ぬことになるのである。

純粹理論的見地より……純粹理論的見地から出發して、學校體操の眞意義を窮知しやうと云ふ態度は、彼の技術主上論者とは、殆んど、水火の如き反目をなすのである。第一に、人と云ふものを綜覽して考へるのであるから、斯の場合の研究の對象物は、人としての內面的生活も、亦、外面的生活も一切包含さ

れて居る。更に、一歩を進めて、種々なる分類を試み、先づ、人の活動、即ち、四肢五體の運動と云ふものを抽き出して考へて見る。吾々が、四肢五體を運動すると云ふ場合は、外形に現はれた運動樣式其のものだけを抽象して考へるのが、事實に近いのであるか、それとも、運動樣式に相當する內面的生活、即ち、精神活動をも考へるのが事實に近いかと云ふことを、先づ、自分自ら內省して見ると、學問上の研究としては、便宜上區別しても差し支へはない。又、區別し得るが、事實としては、どうしても、運動樣式と、其の運動樣式に相當する精神とは、引き離すことは出來得ない。假りに、吾々は、是れは、自分の體であると云ふ場合の自分は、何を指して居るかと云ふことを反省すれば、其處に、別の自分が現はれて居るのではなく、矢張り、自分のものであると云ふ體の中に宿つて居るものが、斯う云ふ聲を出すのである。それでは、其の聲は、どこから出るかと、詮議するために、この五體を解剖して、寸斷々々に切り離して、見たならば、其の聲の出た本源も共に消失してしまう。兎に角、體と云ふもの、心と云ふものは、吾々は、別の言葉で現はして居るけれども、それが、果して、性質の上から見て、別のものであるか、同じものであるかと云ふことは、中々、容易に決定し難い問題である。處が、斯の問題は、どうでもいゝと云ふて、放棄して置かれる問題ではない。吾々が、社會に生きて居る限めには、何んとか解決しなくてはならない問題である。成程、三度の食事を濟して、家族圓滿に其の日を暮して居れば、心と體とは、別であるか、同じであるか、と云ふやうな問題は起りもしないが、日常起らぬからと云ふても、それは、一時的に忘れられたと云ふだけで、其の問題となるべき事實は、決して、消失したと云ふことではないから、時により、折りに觸れて、問題となつて現はれて來る。兎に角、吾々人類は斯う云ふ謎のやうなものを持つて居る。否、持つて居るのではなく、謎のやうに構成されて居る。處が、其の謎は、自分には、謎ではない、ちやんと、心も體も、一所になつて、どれ程、切り離したくも離されない程、緊密に結合されて居るから、心は體であると云ふても、其の反面には、心を充

分に主張することになるし、又、體は心なりと主張しても、其の場合は、體を否定したものではなく、唯、言葉の上でのみ云ふだけのことだから、矢張り體を十二分に認めて居るのだ。何んと云ふても、一ッになりきつて居るから離し得ないが、言葉を發表する機關は、唯、一つで、同時に、二つを同樣に發表することは出來ない。必らず、時間に隔りがあるので、前後の關係は、何んと云ふても免れない。斯の前後の關係、換言すれば、縱の連續(假りに名づける)は、吾々の思想や感情を非常に眩惑するもので、或る意味から云ふと、人間の思想上の錯雜を來たす根源は、此の處に胚胎して居ると云つてもよい。それ程、誘惑力の强いものだから、動ともすれば、自分で、自分の云ふた言葉の前後の關係に惑はされて、自分をも、一種の謎のやうに思ひ違ひする場合もあるが、それは、一時的の病的現象で、人間としての眞面目なる事實から來た聲ではない。自分で云ふた言葉の前後關係に眩惑されるのは變態であるが、他人の云ふ言葉の形式だけを聞きとる時は、眩惑されるのがそれが常態で、聲の響きだけを聞きとつて前後關係を同時に考へるのが變態である。斯う考へて來ると、彌〻、複雜になつて、面倒臭い理屈のやうであるけれども、それは、理屈でなくして、お互、人間として生きて居る上の確かな事實の一つである。そこで、心と體と云ふのは、自分にとつては、確かな有機的統一事實であるが、自分を他人から見られた時、又、他人を自分が見た時は、お互に謎となつて現はれて來る。其の謎は、何處から來るかと云へば、吾々の言語機關が、同時に二つ以上を發表することが出來ない、自然的約束、卽ち、自然的制限があるから、迷ひが出て來る。斯う云ふ考へ方から、更に、一歩を進めて見ると、中々面白い事實が現はれて來る。例令、吾々の言語發表が、同時に、「ア」と「イ」と發表することは絕對に出來ない。必らず其處には、時間的の隔りがあつて、「ア」と「イ」との前後の關係が出來るとしても、其の隔りのために錯雜した迷ひが發生すると云ふのは、其れにはどう云ふ理由があるか、其の理由が判然しない中は、容易に信用することは出來ない。この詰問は、實に、要領を得たものであるが、お互、

人間は、自分について能く考へて見れば、誰でも馬鹿々々しい程、能く理解される。人に説明されると、何んだ馬鹿にしてゐるなと云ふ程、自明の事實ではあるが、順序として、一應、説明するならば、お互は、口は一つであつて、目は二つである。耳も二つある。盲人や聾者のことは、今、左程、必要ないから略述するが、兎に角、明き盲であつても、見える目ならば、差し支へがないが。二つの目で物を見る時は、何人と雖ども、必らず一つの物とは限らない。限らないのみならず、吾々の自然的構成體としての目の裝置が、出來るだけ、多くのものを同時的に見るやうに仕掛されてある。假りに、頸部の位置を固定して、轉廻を禁じても、視野の範圍内に入るもの、意識野の定限内の物は、同時に、映射するのである。一旦、映射した其の印象は、視神經によつて、中樞部に傳達されて、蓄積して置くのである。又、假りに、机の上にあるインキの瓶を見たとする。其の場合の目の働きは、インキ瓶ではあらうけれども、其のインキ瓶が載せられた机も同時に目に映るのだ、物體を目に映射する場合は、唯一、即ち、單に一つのものだけを映射せしむることは、絶對に不可能である。それは、物體の存在する原理から見ても、明かであるが、必らずしも、二つ以上のものを映射するやうに裝置されて居る。

机の上にあるインキ瓶だけを見るのが目的で、机を見るのが厭だと云ふて、テーブルかけをかける、机の姿は隠れても、其の代りに、テーブルかけが出て來る。どうしても、インキ瓶許りを拔き出して見ることは出來ない。さればとて、周圍のものは見るのが厭だからと云ふて、目を覆ふてしまへばインキ瓶も見えなくなる。自然の構造は、否應なしに、吾々の所作を制限するやうに、出來て居るし、其の構造に相當する目的を遂行せしむるやうに仕組まれて居る。斯の關係から押し廣めて考へると、空間的觀念の形成されて來る過程は誠によく理解されるが、今は、必要ないから略述する。要するに、目の作用は、一以上のものを同時的に捕捉する本來の作用を持つて居る。

耳は、どうかと云ふに、目のそれ程、强制的ではないが、性質上、矢張り、

同時に多數の音響を聞きとるやうに裝置されて居る。甲はピアノを彈じ、乙は琴を彈じて居る場合に、自分は、甲の彈ずるピアノが厭だと思つても、琴ばかり聽いて、ピアノの音を聽かずに居ると云ふことは出來ない。要するに、目にしても、耳にしても、性質上、多數のものを同時に捕捉し得る機關であつて、日常吾々は、其の機關の自然的裝置に一致するやうに、捕捉作用を營爲して居るのである。處が、多數のものを、同時に、捕捉するのは、非常に困るから、其處で、神經傳達の場合には、波線を描いて交流に强弱が出來るし、其の强弱に準じて中樞に於いて、按配し、統一の狀態となつて、取り纏めてしまう。處が、斯の取り纏めをする場合に、最も肝腎なる要件は、物の意味を抽象して取り纏めするので、すべての物其の物の姿其の儘を寸分違はず保存して置くと云ふことは頗る困難のことである。斯くの如くにして、吾々の腦中には、實に、種々雜多のものが、蓄積されてあるが、それが、多少、組織的に仕舞込んで置くにしても、元來、多數のものを同時的に捕捉したのであるから、是れを發表する

言語に訴へる時は、其　に、種々なる事情が現はれて、間違ひが起ると云ふことになるのである。しかしながら、斯の間違ひを取り去るには、言語發表機關や其の他、目や耳の構造を取り換へることが出來得ない限りは、自分の腦の中で、捕捉した多數のものを充分に洗練して、最も確かなる內部系統を組織するより外はないのである。斯の意味から見れば、心身の關係問題は、積極的に、解釋するとか、說明するとか云ふやうに、分らないものが存在し、それを分るやうにする類のものではなくして、却つて、分りきつて居る事實を分らないやうにする誘惑物を征服して、分りきつた確かな事實を其の儘、持ち續けて行くための說明や解釋が役立つと云ふことになると思ふ。要するに、所謂、說明や解釋の必要だと云ふのは、吾々の心身の關係が分らないからと云ふのではなく、分かつて居る事實を分らないやうにする、其のものを取り去るために役立てるので、從來考へられたやうな意味の說明や解釋は頗る要領を得ないのであると思ふ。

而しながら、吾々の機能は、以上の如く、器械的に見るのが不穩當のやうに考へる人もあるけれども、器械的に、二つの入口から這入つたものを一つの出口から押し出すから迷ひが生ずると云ふやうに、單純に考へてしまへば、恰度、下足番の居ない博覽會の出入口のやうにも思はれるけれども、吾々の思想生活の性質を考へて見れば、斯の下足番の留守である博覽會の出入口式の狀態に類似して居ることも、意味が生じて來る。假りに、吾々が、博覽會に入場して居る時分に、館外に非常なる珍事が起つたとする。其の時は、幾多の入場者は、同時に、先きを競ふて押し合ひ犇し合ひして館外に出やうとする、其の途端の混雜は所謂火事場騷ぎで、裸足で飛び出すものもあるだらうし、又、携帶物を置き去りにして駈け出すものもある。吾々の思想生活が洗練されて居れば、何時も順序正しく、窮屈なる木戸口である言語發表機關から綵を手繰るやうに表出されるけれども、それが、洗練されない時には、恰度、狹い木戸口から、入場者が同時に飛び出すと云つたやうに混雜を極めるのである。箇中の關係は、子供の言語發表の過程によつて、實證される。又、藝術趣味の方から云ふても、吾々の最も趣味を喚起するものは、單に、一の點や圓を並列さしたと云ふだけのものではなく、一の畫面には、種々雜多の關係が同在して居ると云ふ事によつて始めて趣味性が現はれて來る。假りに、言語發表の形成に準じて、綵を手繰るやうに、縱の連續ばかりであつたならば、それは、實に無意味のものである。けれども、縱の連續も、横の連續も、流轉活動の過程中のものでなく、同在的に連續の一單元を以つて取り纏めてしまうから、面白みが出て來る。斯の面白味と云ふのは、自分の腦中に蓄積してあつた其の事柄が同在的に、展開して、目にも耳にも、餘韻となつて共鳴する處から由來するのである。この理由を考ふれば、最早、吾々の複雜なる思想生活の根本原理も、左程、難解のものではなくして、却つて、容易に理解し易い事實となつて現はれるのである。斯くの如き事實は、單に、思想生活の原則となる許りでなく、吾々の生全體の要求を發表する唯一無二の樣式であると思ふ。約言すれば、生の要求を表出する

生物的見地

様式は、單に、言語發表の機關許りでは、滿足し得ないから其の不足の點を補塡するために、手の運動も足の運動も、顏面の表情も、其の他、ありとあらゆるものを巧みに運轉して、一旦蓄積したものを、外部に押し出しもするし、亦、捕捉もすると云ふことになるので、强ひて、吾々の心身を別の命題として考へるとすれば、身體は、空間に於ける境界のやうなもので、心は、この境界を通過して、他のものと交通する役目を果たすものゝやうに考へられる。以上の問題を專門の立脚地から論究すれば、中々、澤山の論題もあるけれども、體操の意義を見出すための大前提としては此の位の程度で充分理解がつくと思ふから筆を擱いて次の問題に移る。

純粹理論的見地より出發するものは。吾々、人間をば一種の生物として考へて見るのである。この見地から、考へて見ると、吾々人類が、最も困難なる問題として考へる處の心身の關係論は、猶、一層適確な事實として吾々に證明してくれる。一切の生物は、自己の生命を保存するために必要である機關をも具備して居るし、又、其の機關の活動は、內面組織として、機能作用を營爲することによつて、始めて、生物は自體の生命を存續することになる。併し、生物の中には、機關は非常に發達して居つても、其の機關を充分に運用して、生命存續に役立てる程有要なる作用を營むことが出來ない類のものもある。詰り、機關は具備されて居ても、機能が之れに伴はぬ場合である。處が、それとは、反對に、機能が優れて居ても、其の機能を遺憾なく活動せしむるためには、機關が不充分であると云ふやうな類のものもある。前者は卽ち自體を退化せしむる徵候であつて、後者の如く、機能が、優れて居るから漸次進步する處の徵候を現はして居る。斯くの如き、一般生物界の單純なる一つの事實を、人類界の各個人に適應して考へて見ると、人によつては精神力が非常に優れて居つても、體が、どうしても、精神力の命令に應じかぬると云ふやうな、虛弱なる體質を持つて居る人もあるかと思ふと、其の反對に、體は巨大でありつても、其の巨大なる體を充分に活動せしむるには精神力の缺乏して居る人もある。又、中には、

白痴や又低能の如き類になると、筋肉や骨格は相當に育して居つても、精神力の命令が整頓して居ないから、自然的の發育を存續することは出來ないために、彼れ等の壽命は、彼れ等の精神力の不整頓なる點から原因して、早く死んでしまう。斯くの如き狀態から見ると、俗に云ふ、馬鹿の大食ひと云ふやうな人間は、他の生物界に於いて、機能作用が缺けて居るから自然に退化敗滅する悲運を、自ら招致するやうなものである。又、機能が優れても、機關が不充分であるのは、一度、自體の不完全であることを覺悟すれば、內面の機能活動は、之れを補塡して、漸次進步發展する瑞徵を呈すると同樣に、兎に角、精神的命令の力强き人にありては、自體の虛弱を補ふべく進むのは、實に生物界共通の原則である。

更に飜つて、人間と他の生物とを比較して考へて見ると、人間の精神的命令と云ふやうな內面的の活動は、其の形成する過程から見れば、種々雜多の關係を見出されるけれども、其の根本を吟味して見ると、兎に角「生」の要求と云ふ自發的、自動的の力が最大原因をなして居る。吾々が、生物である以上、よしや、其の要求が無意識界に潛在して居るとは雖ども、意識界を逐次押し詰めて見ると、「生きる」「生きたい」「生きなければならぬ」と云ふやうに、言葉の上には、綾を織り込んで現はれるけれども、要するに、「生」と云ふ事實が根柢をなして居る。この生の要求は、生物共通の原則ではあるけれども、生、其のものを自ら覺悟して居る意識には、自ら階段がある。又、生の樣式、卽ち、如何なる形式によつて生きるかと云ふやうなことを考へて、自分の考へで、決定もし、活動をすると云ふやうな階級に屬するものは、是れ卽ち、人類の特權である。人類は萬物の靈長である、と古い昔から云ひ殘された言葉には種々の意味もあらうけれども、斯くの如く、自決の意識、自決活動の意思と云ふものを自認して、自己活動を營爲するといふ點に於いては確かに、他の生物よりは、一日の長者たることを免れない。

以上、簡單なる叙述によつて、吾々、人類の複雜なる諸活動の一切を綜覽す

る中心點は、生の要求であることを明かにし、心身二元的關係ではなくして、心身一元的事實であることをも確めたのである。更に一言附け加へておくが、吾々が學問的に研究する時は、勿論、日常不斷の場合でも、心身二元のやうに考へるのは、つまり、生の要求から現はれて來る處の、「生き方」即ち、生の樣式について考へる處から、導かれるのである。「生き方」には、各生物異なる典型を有するばかりでなく、各個人に於いても、異なる特徴を持つて居る。心身の二元に到來するのは、「生き方」の問題に對して考へる時の第一の問題でもあるし、又、終局の解決點にもなるのである。しかし、第一の出發點として吟味する心身二元の考へは、それは、極めて、簡單であつて、深い意味は無いが、終局解決としての問題であると考へた心身二元の問題は哲學的意味が釀成されるのだ。兎に角「生き方」即ち生の樣式については、茲に、重大なる問題として取り扱はなければならぬ。

吾々の生の要求を事實として現はしたものは、茲に、生活の第一次に於ける樣式を形成するのである。此の場合、生の要求は、無形のものではなくして、有形のものとなる。この有形の事實は、即ち、吾々、人類の生活事實であると同時に、所謂、社會と云ふものが現はれるのである。この意味から見れば、人類發達の歷史は、社會發達の歷史としても考へられる。是に於いて、多數人の集合したる社會を組織する所以のものは、其の根柢に於いて、生の要求に導かれたる生活事實を基礎としなくてはならぬのであるが、偖て、其の生活事實は、千種萬樣の生活樣式によつて營爲し得られるのであるから、社會の各人は、必然の結果として、自己の生活樣式を自覺しなければならぬことになつたのである。この自覺は、一面に於いて、自己の全生活の統一を緊密に組織すると同時に、他面に於いては、自他相互間に相提携しようと云ふ生活事實の解決に對して現はれるのであるから、各人は、自己の生活事實を營爲し、社會的に相互關係を提携して行くためには、各人悉く自己の天賦的なる機關をば、偏頗なく働かして、內面生活を思ふ存分に發揮しなければならぬことになつたのである。

斯くの如き事實に基きて、最初自然的に結合せられた團體生活は、更に一段の進歩をなして、多少自覺的の意味を附加された社會的團體生活を營むやうになるのである。

社會の起原

社會の起原を契約によつて成立したやうに考へる、彼のルッソーの如きは、吾人の所謂、第二階段の社會狀態を謂ふのであると思はれる。無論、ルッソーの所謂、契約と云ふ言葉は、解釋の仕方によりて色々にも考へられるけれども、普通一般の考へ方によれば、契約の事實は打算的意味を有するもので、他に何等の必要もないのに契約は起りやう筈はない。謂ふ迄もなく、人間は元來、自己を利する考へ、卽ち、利己的のものである。恰度、餓狼の如き性質のものであるから、共に、提携和合して社會團體と云ふものが起つたと云ふやうに說明する英國のホッブスのやうな學者もあるが、よしや、餓狼の如き本性を有する人間であつても、平和や和合を要求する何に物かを考へなければならぬ譯である。一度、人間の本性の中に、平和を欲し、和合を望むと云ふ內面の事實があるとするならば、其の平和や和合と云ふものは、更に、一步を進めて、吾々、人類の生、卽ち、生活事實に對して、如何なる關係を保つて居るかと云ふに、それは、平和や、和合のために、生活事實を要求するものではなくして、生の安全、生活事實の全きを得んがために、平和を望み、和合を要求すると云ふことになるのだから、よしや、社會の起原を如何なる見地に認めやうとも、それは、便宜上、異なつた立場を求めたと云ふだけのことで眞面目に考へて見ると、どうしても、「生」の一事を無視してはならぬのみならず、それが、中心となるべきものであると思ふ。其の他、英雄の統括によつて社會が起つたとも云ふ學者もあるが、是れも、便宜の爲め、卽ち、都合上、斯う云ふ考へ方をしたのであつて、それを、其の儘、鵜呑みにして、宣傳するのは、始めて、主張した學者其の人には、何等の罪もないが、後世是れを信じて、持て囃す人の愚を笑ふべきである。

偖て、社會の起原に就ては、大要明かになつたととして、其の社會に生存し

て居る各人は、社會起原の本質に基づき、日一日と自覺的に進みつゝある。其の自覺の何たるやを細密に討究するには、本書のよくする處でないから、其の必要なる主要點だけを擧げるならば、吾々の生活要求を、生活事實として、遺憾なく發揮するための生活機能と機關との一致を企つることである。是に於いて、自覺の催進は、吾々、生物の本能的原動力から導かれたものであつて、社會の文化は、一切茲に根柢してゐるのである。しかしながら、社會の文化發展を普及するからと云ふのではなくして、吾々が、天賦的に持つて生れた、本能的生活要求に伴ふ自覺を進めて行けば、必然的の結果として、社會に文化發達と云ふ結果が現はれて來る。處が、社會の文化を表面的に見れば、其處に一つの指標が出て來るから、其の指標に照らして、各人は、かくあるべしと、强制するやうになるが、斯くの如きは結果と原因との根本的誤謬であつて、結果を見て、原因を左右しようとするのであるから、其處に、恐しき、反撥力が必然的に現はれる。今日まで、流轉して社會文化の中心となつて來た其の一貫の流れは、實に、生の要求其のものであるが、他に、分化發達をして複雜なる事實を營爲するやうになつたから、原因結果の眞相を洞破することに困難を生ずるやうになつたのである。

以上の如き意味の自覺が各人の間に進歩すればする程、全體の社會的傾向は、改善されて行くのである。卽ち、改善の意味は、各個人の生活要求に對する供給が、均等に行はれるので少しでも、其處に不調和な點があれば、それは驟がて、第二の改善を施さなければならぬのである。世界の大勢として、認められて居る、デモクラテックの思潮も、吾人の所謂自覺が促進した結果、政治的意味を假裝して、現はれたのであるが、其の眞相は、謂ふ迄もなく、生活事實の革新であつて、各人の生活要求に應ずる供給物資並に社會的地位の均霑ならんことを求むるのである。斯くの如き思潮が世界的に流布する所以のものは、世界的に、各人の要望する處が、一致した處の事實上の證據である。

而しながら、今日、世界的に、宣傳されて居るデモクラテックの思潮は、果

して、永遠的不變のものであるかと云ふに、吾人は、斯くの如く、靜的根據の下に、社會的事實を考へることは出來ない。社會は何時でも、進步發達の過程中にあるのであるから、今日の自覺がデモクラテックの思潮であつても、後日に至り、デモクラテックの考への下に行はれた政治や法律制度が、却つて、吾々、人類の生活事實を相應に發展せしめないやうになるかもしれない。否、必らずしも、不相應なる狀態に導かれて、生活事實を壓迫し、生の根源に對して、驚くべき悲痛の感を與へるやうになることは、今日から、充分に豫想し得るのである。何故かと云ふに、吾々、人類の自覺は、本質的に、動的作用を有するものであつて、又、生息する吾々の人類社會も、永久的に流轉して止むことなき活舞臺であるから、必らずしも、或る種の思潮を以つて、永遠の地盤を堅めるなどと云ふことは不可能だからである。社會は分化發展すると共に、吾々の自覺も亦分化して、種々雜多の樣式によつて現はれて來る。斯くの如く、千變萬化極りなき、自覺作用を賦有し、且つ、活舞臺に生存して居る吾々人類と云ひ

ながらも、斯の生活要求を、裝飾して、猶ほ且つ正裝したる形によつて、不變的に發表し、同時に、生活要求に伴ふ生活事實の統一を企つる處の要求が是れ又、自然的に持つて居るのである。この正裝したる生活樣式は、一切の生活事實の定律となるので、道德的生活と名づくるもの卽ち是れである。

社會的生活と云ふ範圍の中には、道德的生活をも包含されて居るけれども、道德でない生活をも包含して居るのだから、道德的生活と云ふものは、如何なるものであるかと云ふことを略述すれば、道德でない他の一面の行動もわかるし亦吾々の四肢五體の運動樣式と云ふものも明かになる。そして其の樣式に伴ふ精神的方面とは如何に關係して居るかと云ふことが彌〻判然する。

吾々、人類の生の要求から云へば、前述せるが如く、機關と機能との一致結合を望むのであるが、しかし、如何なる場合、如何なる狀態でも、其の一致結合を望むと云ふことは甚だ困難であつて、其處に、多少の不一致な點がある。是に於いて、吾々の社會的生活の圈內に於いては、道德的生活と不道德的生活

理想

體操は何れに關するか

との二樣に區別することが出來るのである。前者は、機關と機能との一致を意味し、後者は不一致を意味するのである。其れ故に、前者は、理想を見出し、後者は、理想を見出し得ない。勿論、茲で謂ふ道德的生活は、非常に廣義であるから、從つて、理想卽ち、道德的生活の理想の意味も亦廣義であることは、免れないが、嚴密なる意味に於ける科學的見地から見た道德も、理想も、包含されて居るから、如何に、廣義に考へても、敢へて、差し支へはないと思ふ。

偖て、人間生活の理想を見出し、道德生活を指定し、其の反面に於いて道德的ならざる生活を認容するとすれば、學校體操は、果して、如何なる方面に伍すべきものであるかを考へなければならぬ。しかしながら、この問題は、前條、論述したる處によつて、殆んど說き明かされて、最後の結論を述べさへすれば、最早、學校體操の意義は明瞭するのである。卽ち、吾々人間の一切の運動には、運動に相當する精神作用が伴ふのであるが、其の精神作用が、比較的の意味に於いて、强く働く場合と、左程强くない場合とが第一に區別されるし、次に、自覺の問題から見れば、單に、吾々の生活事實を慾求する場合と、更に、其の要望の上に、理想を自覺する場合と、二樣に區別される。前者の區別は、精神力の强弱の區別であつて、後者は、精神作用としての內容上からの區別である。學校體操は謂ふ迄もなく、精神力の强いことを尊ぶと同時に、又、理想を認容したものでなければならぬ。何んとなれば、學校體操は、學校敎育の一敎科であるから、無意味に、運動することを以つて能事了れりとするものではない。無意味にと云ふのは、精神內容、卽ち、運動に伴ふ精神內容を考へない運動を施すべきものではない。十が十迄も、運動と其の運動に伴ふ精神作用を最も尊重すべきもので、體操をする場合に、若しも、精神が拔けて居つたならば、それは、體操と云ふべきものではなくして、無意味なる運動であると云はねばならぬ。是に於いて、學校體操は、徹頭徹尾、運動に伴ふ精神力を認むるとすれば、吾人が、前述せる意味の自覺を有する運動でなければならぬ。偖て其の自覺と云ふことになると、所謂、道德的行爲とは如何に區別すべきであるかを一

應吟味しなくてはならぬ。若しも、倫理學上に謂ふ處の道德的行爲と同樣なものとすれば、學校體操は道德敎育と同意義のものであるかと云ふことになるが、吾人の謂はんとする學校體操の意義は、彼の道德的行爲なるものと殆んど同意義のものであると思ふ。しかしながら、道德的の行爲と云ふ場合には、兒童の行爲を直接道德的に判斷するのであつて、其の判斷に基さて、身體的の要件や、精神的の要件を吟味することになるから、考へ方が、餘程異なる見解を求むるので、若し夫れ、學校體操が、斯くの如き、見地を求むるならば、純粹なる道德敎育であるけれども、所定の運動を要求した場合に、兒童の內的活動卽ち精神活動が、其の運動に一致結合せしむる立脚地を求むるのであるから、よしや、內的活動としての自覺を要求し、理想を求むるとしても、それは身體的運動其のものゝ側から望むので、道德敎育出發點と混同することはないのである。けれども、道德敎育の立場としても、單に、道德的感情を促進し、又、道德的理解を亢進せしめたからと云ふだけでは、其の目的を達し得るものではないから、從つて、それだけの仕事を成し遂げたとしても、それは、仕事全體の半分だけのことで、內面的要素を仕遂げたと云ふのである。更に、他の反面は、道德的の感情や理解を、自己決定としての意志に迄導き、自己活動と云ふ型式によつて、實現せしめなくてはならぬ。この自己活動と云ふ型式は、何んと云ふても、吾々の四肢五體の運動によつて、表現するより外致し方ないのである。如何に、內面的に、道德的感精を持つて居ても、亦、理解を持つて居つても、この心を、實現しなくては、道德的の行爲とは云はれないから、道德的行爲と云ふ場合には、身體的運動が必らずなくてはならぬ、必要條件である。又、學校體操は、身體的運動の方面から取り扱ふにしても、內面的活動を道德的行爲に伴ふ要素のそれ程迄要求するのであるから、殆んど同樣ではあるが、しかし、茲には、性質上、免るべからざる相違がある。それは、道德的行爲の性質上、自他相互關係によつて成立するし、學校體操は、自己の修練、自己の決定を尊重するものにして、體操を演ずる場合に、直接、對他關係を主とするものでは

人格活動

ないから、道德的行爲は、對他的關係によつて其の意味が生ずるのに反して、學校體操は、對他的關係を離れて、意味が生ずるのだから、この點は、見逃すことの出來ない相違である。

而しながら、人格的活動と云ふ場合は、對他的道德と個人的道德とを包含して、兩者の統一點を意味するのであるから、この點に於いて、學校體操として、要求する內面活動と、道德的行爲としての身體運動卽ち對他的要素とは、緊密に結合せらるゝことになる。以爲らく、人格とは、人の人たる所以の謂ひにして、人としての本性を統一的に考へた場合である。更に、科學的に規定してある倫理學上の見解から之れを定義すれば、自己意識にて、自己決定をなし、自己活動をなしたものは、卽ち、人格的の行爲であると云ふやうに考へられて居る。この見解に基きて考ふるならば、個人的意味の道德をも無論包含されることになるから、從つて學校體操として行ふ場合の運動としても、前述の如く、內面的意味を拉し來たるならば、人格的活動の範圍內に等しく包含されることになる。其れ故に、吾人は學校體操を定義して、學校體操とは、人格的運動を、身體的方面から觀たる運動である。と謂ふのである。

倫理學的解說

學校體操を以上の如く定義して見ると、少しく、奇態の感ないでもない。理論的解說の大要は、殆んど述べたのであるが、翻つて、今日、我が邦に行はれて居る學校體操を見れば、吾人の謂ふ處の、自己活動であるとか、自己決定と云ふやうなものは、少しも見出し得ないのではないか、と論難するであらう。卽ち、一から十迄、號令を以つて、兒童を運動せしめ、一擧一動、其の號令に、反すれば體操としての價値は、生理的にも訓練的にも、認められないやうになつて居る今日の狀態から考ふれば、最早、寸毫の疑ひもなく、他律的制約に極限されて居るから、自律的に進む處の、自己決定、自己活動と云ふやうなものは、机上の空論に過ぎないと考へられるであらうが、實に、今日の學校體操は、この狀態にあるのである。又、學校體操の本質上、斯くあるべきものであると考ふる人も決して尠少ではない。而しながら、吾人の見解から云へば、現今の

學校體操が萬事他律的に運動すると云ふことは、教育的意味から見て、其れは、間違つて居る見解であるから、茲に根本的革新の必要を認めると同時に、體操の本質上、かくあるべきもの、卽ち、他律的なるべきものと思ふのも、間違つて居ることを意味するのである。何故かと云ふに、我が邦、現時の學校體操は、瑞典式の系統を持つて居るので、其の根本精神としては醫療的體操の變形であつて、整形的矯正を主としたものである。其れ故に、醫師が患者に對する態度であるから微頭徹尾他律的でなければならぬと云ふことになるのだ。成る程、斯くの如き、醫療的方面も、學校體操の一部分としては必要ではあるが、全然、是れのみを以つて組織することは、教育上非常に缺陷が生ずるのである。しかしながら、この瑞典式系統の學校體操中には、全然、自己決定と云ふやうな精神的態度を見出し得ないのであるかと云ふに、教授者の取り扱ひやうによつては、充分に、自己一定の自由をも見出し得るのである。尤も、瑞典式系統の體操は、運動の性質上、他律的であることは免れないが、若しも、教授者が、兒童の發動的精神を巧みに啓發して、嚴格なる號令の下にありながらも、運動其のものを施行する其の途端に、一の覺悟を持ち、自動的には、充分やり得る自由を持つて居る。されど斯くの如き意味の自由と自己決定は、あまりに狹少であつて、しかも、一時的、發作的のものであるから、人格的活動の反面觀であると云ふことは出來ないのである。人格的活動には、少なくも、一の運動を起す場合には、動機があつて、更に、志向が現はれ、彌々行爲と云ふ身體運動が現はれるのであるから、前述せる瑞典式系統の體操よりは餘程、自律自動の餘裕がなければならぬのである。斯の意味から見て、學校體操は、瑞典式系統のもの、卽ち、現今に於けるものばかりでは、學校教育の意味から見て實に大なる缺陷があると云ふことは事實上明かである。

現今の體操にのみ執着して考ふれば、吾人の所謂學校體操の意義は頗る牽强附會のやうに思はれるであらうけれども、更に、教育的目的の見地から考へたならば、從來の如き意味の學校體操は最早革新しなければならぬことに想倒す

ることゝ思ふ。

教育の目的は、色々に考へられる。殊に、晩近に於いて、學としての教育の性質に關して種々雜多の思潮もあるが、要するに、教育の目的は、人生の目的によつて、其の終局を告ぐるものである。斯の終局點から、下降して、種々の目的を建設することは無論可能であるのみならず、可能でなくてならぬのであるが、其の終局する處は、人生の目的なるものに到達せんがための一階段であつて、其の終局をば決して度外し得るものではない。斯の見解から考へて、古來幾多の教育學者、或は、倫理學者が考へられた目的論、就中、倫理的至上善の問題を一瞥して、如何なる歸結點を得らるゝかを試みなければならぬ。

繁を避くるために、代表的の諸說のみを左に列擧することゝする。

(1)快樂說　人間の目的とする至善は快樂を得るにありと考へる說である。

(2)利己說　人間の目的とする至善は、自己自身の慾求をのみ主とする說である。

(3)利他說　利他の感情を基礎とするもの。

(4)功利說　全人類の福祉、卽ち最大多數の最大幸福を得るを以つて至善と見做した說である。

(5)合理說　感情を排し、理性のみを主張する嚴格主義の倫理說である。

(6)苦行主義　耶蘇、エクゲナの如き情的慾求を禁壓したる倫理說である。

(7)完全說　全人格の滿足を云ふものであつて、前二者を、稍々、調和した立脚地である。

以上の諸說を綜覽して考へて見ると、其の何れを採用するにしても、吾々、人類が、至善とするには、あまりに、狹隘である。假りに、一個人としても、亦、社會的關係の一員としても、將亦、國民的生活を營爲する一員としても、感情的慾求もあれば、理性的慾求もあるし、社會的名譽の慾求もあるから、單に其の一方に偏することは、吾々人類の生存する事實から見て許し得ないのである。斯くの如き事實あるに拘らず、偏頗な考へ、しかも、學術的に根柢を求

めた處の學說の現はれたと云ふのは、要するに、人性の見方が相違したから、從つて、人格觀念の內容が、異つたのである。其れ故、吾人の謂はんとする處は、徹頭徹尾、吾人々類の生存して居る事實に立脚して考ふれば、吾々、人格の內容を形成する中心點は、知とか情とか、將亦、意志と云ふやうな、心理學的分解を脫して、生存する有機的統一の點、卽ち、自己の生命を保持する中核に認むるのである。自己の生命を保持する所のものは、其れが、至善の行爲となつても現はれるし、又、自己の生活要求の中心ともなり、生活事實の開拓ともなるのである。今の場合、專門科學の見地より之れを論證する必要もないから、簡略にするが、吾人の中心思想を一言すれば、人格の唯一性を高潮し、一切の行爲は、勿論、生に關する哲學的意味をも闡明したいと思ふのである。是の思想を假りに、人格唯一主義と名づけておくのである。

斯くの如き人格觀念の內容から考へて見ると、運動を取り扱ふ學校體操は人格的活動の反面から觀たものであることが明かになる。

第二節　學校體操と學校體育

抑、體育と云ふことは、旣に、解りきつた事實であつて、しかも、その事實を多少組織的に考ふる時は、中々困難である。先づ、簡單に考へて見ると、學校內で、兒童の體のために、行ふ處の事柄は、是れ取りも直さず學校體育である。又、社會公衆　ために施すものは、社會體育である。又、一家庭內部として施設する處の事柄は、家庭體育と名づけてもよい。又、一國民を主として施すならば、それは國民體育である。又、世界共通のものとして行ふならば、それは世界體育である。體育と一口に云つてしまへば、何の苦もなく云ひ得るが、其の體育なる事柄によつて考へて見ると、第一に、吾々が、生存して居るからには、一箇の體を持つて居る、其の體を健全にし、且つ、健全なる上にも、亦、壯健にすることが、卽ち、體育の體育たる所以であつて、其れ以上、吟味する必要もないやうに思はれるが、偖、健康なる身體、或は、强壯なる身體は、何のために要求するか、健康や强壯其れ自身が、目的となるべきものであるか、

それとも、更に一歩、深みに這入つた處に、行きつくために其の必要を宣傳しなければならぬのであるか、此の問題に解答するためには、茲に、第二の意義を見出さなければならぬ。

吾々の體が健康であり、又、强壯であると云ふことは、其れ自身が何等の價値も認められない。唯、健康なる身體、强壯なる身體には、精神力も從つて健全であるから、社會的に價値ある活動をなし得ることを豫想して始めて健康も强壯も有意義となるのである。若しも、身體が、如何に、健康であつても、亦、人に優れて、强壯であつても、其の人のすることが、社會的に何等貢獻する處もなく蠢々として其の日を過し、所謂、醉生夢死であつたならば、身體の健康も、强壯も、何處に、其の價値を認め得るか、唯、其の人が、苦しい病の經驗をしないと云ふやうな、極めて狹少なる意味のものである。しかしながら、多くの場合、體が健康であり、强壯であれば、精神も爽快であるし、神經系統も健全に働くから、此の意味からして、體育の必要が認められるのである。

體育の成立、……以上の意味に於いて體育の必要は認められるが、偖、其の體育は如何にして成立するかを吟味すれば、體育成立の要素を大別して、二方面に認められる。卽ち、第一は、主體としての人がなければならぬ。主體となる人と、客體となる人の體に應ずる客體がなければならぬ。第二は、客體となる物との存在は、體育成立には、なくてならぬ重大要素ではあるが、しかし、此の、主客二方面が各々、箇別的に存在して居るだけでは體育は、未だ成立しない。例令、此處に、人が居るとして見ると、其の人の體を養ふためには、なくてならぬ營養物があるとする。斯の場合は、確かに、主體と客體との共存ではあるが、體育と云ふ事實は成り立たない。假りに、吾々が、食事をする時に、食膳に對して、据つて居ても、それは、お膳に對して据つて居るだけのことで、飢えたる場合には何等の役にも立たぬ、膳部の料理を食べて始めて、吾々の食欲を滿足するのである。體育と云ふ場合も、是れと同樣の理屈で、吾々の體を養ふためには、種々雜多の方法もあるが、方法や、客體となるべき物を並べ

たからと云ふても、決して、體育にはならぬので、主體となるべき人と、客體となるべき事物との間に、相交通する處に、始めて、體育と云ふ事實が成立されるのである。

體育的方法とは何か……斯の方法の問題については、其の範圍、極めて廣いのであるが、方法上の原理となるべきものを述べるならば、先づ、有意的方法と、無意的の方法との二方面に區別して考へられる。有意的方法と云ふのは、主體となる人が、自分の體質を自ら能く知つて、其の體質に相當する客體を選擇し、且つ、主體と客體との交通をも能く考へ、少しも無理のない程度と範圍とに於いて、自己の體を養ふ方法を謂ふのである。處が人は往々にして、自分の體質には不相應であるものに趣味を持ち、或は興味を惹き起し、體のためには、わるいとは知りつゝも、遂ひ、好きのまゝにやつて居るから、體を損ふことは、世間多くあり勝ちの事實である。斯くの如きは全然非體育的の事實である。更に、考への足りないものになると、自分の體質がどうであるか、客體としてとるべきものがどうであるか、少しも、考へずに、世間の人が、體のためになるからと云ふて、運動をする、靜座法をやるから、自分も亦靜座法をやると云ふやうに、全然、自己の自由意志を觀ることなく摸倣的にやつて行くのであるから、其の結果は甚だ危險なものである。斯くの如き方法をとるものは、吾人の所謂、無意的方法であつて、實に恐るべき弊害に陷り易いものである。

學校體育の方法上の原理……學校體育は、其の施設について自ら制限があるから、在校兒童全員に對して、滿足を與ふることは無論不可能でもあらうが、しかし、前述の意味に於ける方法上の意義が成立するならば、主體となる兒童自らが、有意的方法をとるべきか、將亦、有意的方法を採擇すべきものであるかは一應吟味しなければならぬ。勿論、學校體育は、一の教育事實として考へるのであるから、未發達の兒童であつて、大人が、自由の境地にあつて體育をなす場合とは自ら異なるが、其の發育過程中の學童であるからと云ふて、何等の干渉も、補導もなしに自由に放任して置くことは無論教育的のものではない。

何故なれば、彼れ等兒童は、多くの場合、吾人の所謂、無意的方法を以つて無暗に自己の好き勝手のことをなし易いからである。さりとて、徒らに、拘束して、唯、教師の意の儘に强ひるならば、それは、恰度、食慾を欲せざるものに對して、食を强ひ、猶且つ、分量の多きを望むと同樣であるから、必らず、其の兒童の體にも、亦精神にも、大なる弊害が現はれるに相違ない。是に於いて、學校體育方法上の原理となるものは、兒童の自發能力を基本として、漸次、自己の體質、强、弱、等を自覺せしめ、自己自らの體に相當する客體を要求するやうに仕向けなくてはならぬ。斯くの如き、方法上の原理から見れば、前述せし如き、健康は健康其れ自身として價値を認むるものではなく、健康の結果、當然、齎らす處の價値其のものが結局、健康の目的となり、理想とならなければならぬ。若しも、一度、玆に着目すれば、學校體育としこの方法は、强く迄、無意的方法を避け、有意的方法を求めなければならぬことになると思ふ。

以上の意義に於ける體育と學校體操との關係……前條に於いて大要述べてあるが如く、學校體育としての主體となるべきものは兒童自らであつて、其の客體となるべきものは、學校內部に於ける體育的施設其のものである。而して、此の主體と客體との交通によつて成立する體育的事實は、兒童自らも、教師自らも、有意的の方法によらなければならぬことは既に明瞭してゐる。又、一方、學校體操の概念は、論理的に稍々不徹底の處あるにしても、人格的活動の反面觀、卽ち、肉體運動の方面から見た場合であるとの意義を認めたのである。斯の兩樣の意義を、公平に相對照して考へる時は、學校體育としては、其の方法、卽ち、主體と客體と相交通せしむる兒童自らの精神的態度が有意的であると云ふより以上、進み得ないのであるが、之れに反して、學校體操は、人格的意義に迄到達することが出來るのみならず、人格的決定でなくてはならぬ。斯の見地から考ふれば、單に有意的方法を認めた體育事業は、人格的規定の下に行ふ學校體操の中に包含されてしまうことになる。又、斯の考へを事實上の問題に移して考へると、體育は學校體操の一方法であると考へなければならぬ。

果して、體育は學校體操の方法なりや……體育と、學校體操との關係論について考へられた、今日迄の結論は、體育は、主にして、體操は體育の一方法であると考へられたのである。即ち、吾々の體を養ふためには、種々、雜多の方法であるが、學校で行ふ體操も亦其の一方法であると考へたのである。勿論、學校體操や、學校體育を、常識的に考へ、何等吟味することなしに、規定すれば、確かに、學校體操は體育の一方法であるとも考へられるが、吾人が、前述せし論點から、漸次、論歩を進めて、考へて見ると、體操の方が主であつて、體育は却つて一の方法となるものである。此の結論を見て、人は、學校體操をやれば、學校體育の一切はなし得るのであるかと反問するが、此の反問は、極めて、皮相の常識から出たので、恰度、吾々、日本人は、米飯が生命の親だと云ふから、其の他の副食物は何にも食べずによいかと云ふ反問と同樣だ、學校體操が、人格的の反面を代表するものであると云ふ結論から考ふれば、よしや、有意的事實であるにしても、それは、全人格の見地から考ふれば、極めて、一小部分のものであつて、吾々の、全人格に統一せらるべき方法的要素であると云はなければならぬ。

更に、前條の結論を悉く放棄して、虛心平氣に考へて見れば、學校體操は、勿論體を鍛へることも考へられるが、更に、心を練ると云ふことも亦なくてはならぬ。體を鍛へ、心を練ると云ふことは、軈がて立派な人間となると云ふことの要求が、暗默の中に認められて居る。處が、體育の方は、體を養ふと云ふことが、九分九厘の望みであつて、體が健康になり、强壯になれば心も亦健全になるし、更に、立派な人間となつて云々と云ふやうなことは、敢へて考へられないと云ふのではないが、學校體操の方は、單に、體育と云ふよりも、精神を鍛練する方に緣故が近いのであるから、どうしても、學校體操が主であつて、學校體育は、其の方法に屬すべきものであると思ふ。併しながら二者全然異なるもので同一にすべきものでないと云ふのではない。體育は卽ち體操と云ふことには至らないにしても、學校體操は一面體育的事實を包含するのであるから、

兩者、離るべからざる關係あることは自明の理である。

第三節　學校體育の區分

學校兒童の體を健康にし且つ、壯健に鍛へるためには、どうしても、運動がなければならぬ。偖て此の運動には大體二樣の區別が認められる。卽ち、規則的運動と自由運動とである。前者は、所謂、學校體操なるものが是れに相當するし、後者の自由運動は、卽ち、休憩時間中の自由なる運動が當て嵌めることが出來る。此の自由運動は遊戯のやうにも考へられるが、其の運動の性質上自由運動と遊戯とは異なる處が自ら存するのであるから、遊戯は自由運動の中に入れないで、更に、特別の項を設くるのである。卽ち

1. 規則的運動
2. 自由運動
3. 遊戯

以上の三區分は、運動によつて、兒童の身體を養育する處のものであつて、兒童の自然的要求に基くものである。從來は、此の點に最も重きを置き其の他は殆んど顧られないやうな事實となつて居たのであるが、晩近に於ける科學の進歩は、學童の體育、乃至は、教育上、唯、運動を授け、遊戯を行はしめたのみでは其の目的を到達することが不可能であることを確めた、是に於いて、學校内部に於ける施設上の一般的衛生を充分に考へなければならぬことになつたのである。勿論、今日迄も、學校々舍の建築に對する衛生的關係や、或は、机、腰掛等はそれ〳〵、兒童身體發育程度に應じて、大小各々異なるやうに裝置してあつたが、多少形式に流れた傾向があるので事實上左程注意されて居ないやうである。併し、是れ等の事は、大切な事であるが、更に、新規の方面にも、考へなければならぬ事が澤山ある。斯くの如き、學校内部に於ける一般衛生上の注意を促進するに至つたのは、豈に獨り、我が邦の學校兒童に對する必要許りではなく、是れが、世界共通の要求である。一千九百十三年米國に於いて開かれた第四回萬國學校衛生會議にて決議された其の要項を見るに實に細密なる

注意を拂つて居られるやうに思ふから、茲に、引照することにする。

第一門　學校建物、敷地、及び設備上の衛生

此の部門に屬する注意要項は、1.位置、2.敷地、3.建築、4.裝飾、5.換氣、6.照輝、7.掃除、8.便所、9.手洗所、10.机及び椅子、11.敎場用具、12.敎科書、13.湯呑所、14.體操場、15.遊戯場、16.器械體操室、17.集會室、18.圖書室、19.研究室、20.敎室、21.講堂、等の二十一ヶ條がある。其の中でも、換氣法や机及び椅子の如きは、前述の如く、少しは注意されて居るが、其の他の設備に關する注意は殆んど度外されて居る狀態なのである。

第二門　學校管理、學業及び學科の衛生、

此の部門に屬するものは、1.敎員の衛生、2.兒童の衛生、3.學課の衛生、4.疲勞、5.食堂及び浴場の衛生、6.四季の感作、7.授業時間、8.家庭作業、9.(復習)、10.休憩、11.長休暇、12.身體運動、13.遺傳、14.敎室の廣さと兒童數、15.口腔衛生、16.豫防衛生、17.性慾衛生、18.遊戯、19.體力養成、20.家庭衛生、等二十種の注意要項を擧げてある。此の部門に相當するものが何か一つでも我が邦の學校に行はれて居るだらうか、寡聞の吾人は未だ聞知しないのである。勿論、此の二十ヶ條の中には我が邦現時の經濟狀態では施設し得ぬ事もあるだらうけれども、敎育者が少しく注意すれば充分行ひ得る事でさへも、未だ何等注意されないのである。

第三門　學校に於ける醫術的衛生及び衛生的監視

此の部門に屬する事柄は主として行政的關係を有するものである。1.學校兒童の衛生的監視、2.學校醫、3.學校看護婦、4.學校診療所、5.學校に於ける衛生的監視と家庭との關係、6.敎室の衛生的監視、7.學校用具及び敎科書の衛生的監視、8.流行病の豫防、9.學校兒童の身體的檢査票、等の九ヶ條となるが、行政的關係や經濟關係もあるから我が邦現時の狀態では實施上甚だ困難であることは免れないが、學校兒童の身體を健康にし且つ敎育を完全にしようと思ふならば、どうしても、斯くの如き衛生的注意を忘れてはならぬ。

要するに、輓近に於ける學校衛生學の指定する處に基けば、學校々舍及び其の設備に關する衛生、――學校兒童の衛生――教育實施方法に關する衛生――等の三大綱目に分類されるのである。以上列擧したる諸種の要項は、學校體育として最も注意すべきものであるが、今其の大綱を區分すれば、左表の如く簡潔になる。

學校體育區分
- 運動
  - 1. 規則運動
  - 2. 自由運動
  - 3. 遊戯運動
- 衛生
  - 1. 校舍衛生
  - 2. 設備衛生
  - 3. 教員衛生
  - 4. 教育方法衛生
  - 5. 兒童衛生
- 行政
  - 1. 體育視學
  - 2. 學校體育局
  - 3. 學校醫療所
  - 4. 學校醫
  - 5. 學童生命保險

以上の區分は、科學的分類法に基ゐたものではなくして、學校兒童の身體を養育するについてなくてはならぬ事實を大綱に區分して列擧したに過ぎないのである。

第四節　學校體操の目的

前表に掲げたる規則的運動の中で、學校體操は、其の主要なるものであるから本節に於いては、學校體操の目的を一瞥したいと思ふ。從來考へられた目的論は、分解的に組織的に考へられたので研究の點から見れば實に完全したものである。例令、直接の目的としては、生理的價値を促進せしむるために、自然的姿勢を保持せしむること、身體各部の均齊的發育、健康の保護增近、運動の敏捷及び優美、强壯、耐久、或は適應と云ふやうな諸項を擧げてあるので、兒童の身體を發育せしむる上については、是非共考へて置かねばならぬ大切なる要項である。更に、間接的目的としては、主として、精神的方面を考へて居るやうに思はれる。知的修養として注意、觀察、記憶、想像、思考、等の心理

的修得を以つて目的と見做したのである。又、道德的修得の方面にては、快活、從順、果斷、沈着、勇氣、忍耐、敏活、精密、規律、協同と云ふやうな兒童相當の道德的修得を示してあるから、殆んど、完全した目的上の見解であると思ふ。斯くの如き目的觀は實際教育者の間にも、最早既に充分理解されて、實際教育の場合に於いても、相當に心がけて取り扱はれて居るが、實際の成績を見ると、直接目的にしても亦間接目的にしても、唯の一つも實現されて居ないやうに思はれる。勿論、目的實現の結果があまり際立つて現はれないと云ふ其の原因は素より百千萬ならずであるけれども、以上の目的觀は、少しく分析的に過ぎて、兒童生活の全體的活動を輕視した傾向があると思ふ。目的觀を科學的に定置する場合は、當然、分析的に考へなくてはならぬが、斯くの如　分析的の結果指定したる目的觀を綜合して、兒童生活の運動狀態に適應せしむるには、其處に、相當の考へを以つて取り扱はなくてはならぬ。處が、實際教育者の實狀と斯の分析的科學的目的觀と相對照して見ると、科學的目的觀を取り扱ふには、少しく困難のやうに思はれる。何故かと云ふに、兒童の運動は、綜合的であつて、注意を修練するとか、思考を鍛へるとか、そんなことは、少しも意に留めないから、教授者の方で、適宜に按排し、兒童が知らず識らずの間に注意を惹起し、思考を練るやうな運動の技を授けるのであるが、此の場合、運動の生理的要件と精神的要件である注意とか思考とか云ふ事柄と結ひつけて目的觀に於いて定置したる諸要項に對して、相當の運動技をも規定しなければならぬ。換言すれば、運動技の生理的、心理的、教育的、道德的、等の價値表を作成しなければならぬ。斯くの如き、價値表が、假りに作成してあるとしても、其の價値表に現はれた價値格は運動技全體から見れば、極めて一小部分であつて、其の所定運動技の性質全體を代表すべきものでない場合もある。唯、比較的の意味に於いて、重きを、價値格指定の一點に置くと云ふことに過ぎないのである。其れ故、科學的目的觀の定置は、決して、無用のものだと云ふのではなく、我が邦、學校體操の發達上、今日迄の處は、前述せし目的觀で間に合つて來た

が、此の科學的目的觀の上に、更に、統合的目的觀を見出さねばならぬ時代になつたと思ふ。それは、外でもない。兒童の全生活中一小部分に重きを置いて教育的價値の向上を企つるよりも、兒童の全生活を綜觀し、就中、全生活の中心となるべき、人格觀念の發達に根柢を置いて目的觀を指定する必要を認むるのである。斯の意味から見れば、科學的目的觀は、學術的研究的であつて、統合的、人格的目的觀は實際的であると思ふ。併し、科學的目的觀を忘れては統合的目的觀の實現を見ることが出來ぬのであるから、實際教育者は、箇中の消息を充分に理解し、科學的目的觀の統一點を指定したものであると云ふやうな意味で、件の統合的目的觀ぞば考へてもらひたいのである。

統合的目的觀の出發點……近きより遠きに、易より難に進むのは一般の定則である。假りに旅行者に問ふも、行程幾千里の大旅行を企つるにしても、一躍其の目的地に到達することは出來ない。行程が長ければ長いだけ、それだけ、種々雜多の準備も必要であるし、又、旅程の驛所も數多いのである。東照公が、人生を歌つて、「人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し」と、遺訓せられた。一歩は一歩より進み、秩序あり、階段ある道程を辿らなければならぬ。人生は實に大旅行なり、旅行中に又、大なる戰爭がある。平和中にも、亦、平和の戰爭がある。其れが經濟戰となつて現はれ、或は道德上の戰爭となつて現はれ、現はるゝ其の形は實に千變萬化である。人は、お互に此の戰爭場裡にあつて、奮鬪もし、苦戰もする。其の結果、如何なる形にせよ優者の位置を贏ち得て永久の生命を宿さんと企つるのである。

人、各々、一時的の生命を欲するよりも、永久的生命を欲し、其の生命を宿さんがために、種々なる修練が必要となる、又、其の反面から云へば、種々なる各個の修練は、直接には、細密なる目的もあるが、其の結局する處は、萬人悉く、永遠の生命を把持することである。

斯の目的を實現するためには、自ら順序階段がなければならぬ、一躍勝利の地歩を占めやうとするものは、却つて、不良の結果を招致し、不幸に沈み悲境

に陥るのである。偖て目的實現の順序階段を何によりて區別して考ふるか、西洋人と日本人との見分けをつけるためには、毛が赤いとか、黑いとか目玉が茶色であるとか、黑いとか、言葉が異なるとか云ふやうに種々なる區分の標準はある。日本人と西洋人との區別を、「うんこ」の大小を以つて區別した、日本の文士もある。西洋人は細くて長い、日本人は太くて短い。こんな滑稽な分類標準も亦一興であるが、人生の行程を眞面目に考へて目的實現の順序階段を見出さうとするならば、唯、面白いとか、お可笑しいとか珍らしいと云ふばかりでなしに、間違ひのない事實に基づき、誰れでも承知の出來るものでなければなるまい。

お互人間が、此の世の中に生存し、白癡や風癲でない限りは、道德的意識を確かに持つて居る。唯、其の發達程度は、萬人萬樣であるかもしれないが、兎に角、相當に發達した道德意識は備へて居る。俥屋には俥屋相當に、客人に對する禮儀も作法も、責任觀念もある。又、羅宇屋、屑屋、下駄の齒入れ等、世間一般から極めて賤業視されて居るものでさへも、中々立派な道德觀を持つて居るものもある。下女は下女相當に道德觀を心得て、主人の批評等は中々巧妙なものである。兎に角、何人でも、具有する斯の道德意識の一般的なる發達階段に應じて、目的の順序次第を規定したならば、科學的目的觀に於いて缺けて居た所、卽ち、力の足りない點は、充分に補救し得ると思ふ。

道德的意識發達過程に對する見解……道德的意識發達過程に對する見解は樣樣であるが、先づ、二樣の方式によつて考へてみようと思ふ。現在お互が生存して居る社會一般から見れば、前に述べたやうな道德觀や、倫理批判が行はれて居る。現在、斯う云ふ道德觀念を各自持つて居ると云ふのは、一體、どう云ふ發達によつて形ち造られたものであらうかと、漸次研究の歩を進めて行けば、過去遠く、原始民族に迄も溯り、更に進んでは、宇宙實體の發生に迄も懷疑の矛を突き込まなくてはならぬ。斯う云ふ見地から研究するのが、卽ち、系統發生的の研究である。此の種の研究として茲に最も大切なのは、第一に時代の分

け方を規定しなければならぬ。其の時代區分には、社會的見解を採ることも出來ようし、又、生物學的見解も、地質學的見解も、人類學的見解も成立つのであるが、今の場合、是れ等の見解を一々論證することは、左程の必要を認めないのであるから、系統發生的方面は省略し、次に、個體發生的見地より、必要な點だけ論述しようと思ふ。

個體發生的研究と云ふのは、時の分類單位を個體の發生、卽ち、受胎の時を以つて、極限とし、其れから、漸次發達する其の過程を研究するのである。系統發生的研究は、個體發生的研究よりも、時間的に長くして、又、其の範圍から見ても、極めて廣いのである。二者、各々研究の範圍と程度とを異にするけれども、亦、自ら、相提携する處がある。

系統發生的見解から出發して、道德的意識の發達を考究しようと云ふ場合に、單に抽象して、道德的意識其のものばかりを研究することは、正鵠を得難いので、多くの動物と比較研究をしたり、或は、生理的に、解剖的に、色々な方面から研究しなければならぬ。併しながら、此の種の研究は、自ら極限があるので、それ以上の研究になれば結局學者の想像に訴へて判定しなければならぬ。此の想像を更に事實によつて證明しようと云ふのが、卽ち、個體發生的研究の大に價値ある處である。詰り、吾々、人間が母胎に受精して以來發育する其の過程は、宇宙原始の狀態から今日までの長年月間の歷史を極めて、短日月の間に經過してしまうことを認めて、胎內生活の十ヶ月間は、宇宙發生以來の大歷史を縮少したものであるから、其の胎內生活を展開すれば宇宙原始狀態から發達した其の過程は事實によつて證明されるやうに考へるのである。此の點から考ふれば、系統發生的研究も、亦、個體發生的研究を待つて始めて、大成することになるから、單に、研究方法上の關係ばかりでなく、內面的關係も認められるのである。

其れ故に、よしや個體發生的見地から出發するにしても、論步を進むるにつれて系統發生的領域に迄溯らなければならぬ。又、系統發生的見地から考へた

人性の問題

事實であつても、そたが、個體發生狀態に何等の實證も認められないならば、それは、假空の虛說である。其れ故に、兩者の區別は、學問的研究の便宜上分類したに過ぎないので、詰りは、結局、發達に關する一定の法則を發見すると云ふ考へで組織された研究法である。

第五節　自己中心的目的

如何なる意味であつても、自己を中心とする目的觀を排擊する處の一派は、人性問題の見解が他愛的のものであるから、自己を中心とすることは、絕對に不合理であると主張するのである。斯くの如き問題は、實に根本的解決を要するのであるが、今の場合、是れ等の問題を專門的に取り扱ふことは許さぬから、吾人の信ずる斷案に基き、論步を進めやうと思ふ。

自利が人性の根源であるか、利他が根源であるか、將又、ヒユームの謂はれたやうに、同情同感の性が根本であるかは古來學者間に議論のあつた問題であるけれども、吾人の見る處に據れば、自利も利他も、同情も同感も、等しく吾吾、人性の中に包含されて居るものであつて何れが根本で、何れが枝葉であると云ふことは云ひ得ないと思ふ。唯、人性としての發達過程から見て、自利も利他も、同情も同感も、其の現はれ方に於いて時期が異なるだけの相異であつて、何れも、根本であつて、しかも、枝葉と云へば、又、枝葉と云ひ得るのである。吾人は、古來の學者が重要なる論題として取り扱ひたる人性問題中殊に自利々他の問題を對立的に考へずに、現はれ方を中心として考へる方が寧ろ事實に近いし、且つ、實際教育にも貢獻する處が多いと思ふ。

假りに、自利が人性の根源であるからと云ふた處が、他愛的感情を吾々人間が事實として備へて居る。又、利他が性の根元であるからと云ふても、事實としては、自己の利益を計り自己の生存を企つると云ふことは、爭ふべからざる事實として各人各個具有して居る。其れ故に、何れが根本であるかと云ふことは、教育問題としては、あまり必要のないことであつて、それよりも、自利々他の現はれが、如何なる時期に、如何なる狀態によつて理はれるかを考へなくて

はならぬ。此の現はれ方の研究は、是れ兒童心理學の領域であるから斯學の認むる原則を基本として目的觀を述べようと思ふ。

生後四ヶ月乃至五ヶ月の嬰兒は、全然感覺的生活であつて、目的に一致する所作は本能的にするけれども、目的觀念は形成されて居ないのである。例令、泣き出した時には何にか變つた刺激を與へると、直ちに泣を止めると云ふやうに、感覺的に生活してゐるが、少し、發達すると、感覺的に滿足しないので、何か目がけて手を伸したり、或は匍匐したりするのである。斯の場合、子供の要求するものと他のものとを交換してしまうと非常に怒り急に泣き出すのである。此の時期になれば、最早、物を知的に認めると云ふ作用が出來て居るから、自分が要求する處の對象物の觀念は形成されて居る。

此の目的觀念の形成された時代の所作を見るに、乳齒の生えがけ等は自然に口腔に刺激を要求するから、母の乳房を嚙みて苦しめること等は珍しくない。其の他種々なる所作を綜合して考ふれば、最初の目的觀念は、利他的觀念に導かるゝものではなくして、徹頭徹尾自利的であつて、自己を滿足する考へから目的を形成されるのである。猶ほ詳しく論究すれば際限もない事例はあるが、要するに吾人の謂はんと欲する道德意識の現はれとしては最初、自己を中心とした形で現はれると云ふ前提を述べたに過ぎない。

此の前提に基づき、更に細節に亙つて考へて見ると、自己を中心とした道德意識の現れは何時頃迄續くのかを吟味しなければならぬ。此の問題については、第一に自己の意義を嚴定する必要もあるし、道德其のものゝ意義を規定する必要もあるが、其れ等は茲に省略して、兒童生活の事實を顧みて其の結論だけを云ふならば、所謂、兒童期全般に亙りて、斯の自己中心的道德思想が表現されて居る。勿論、年齡の進むにつれて、社會的關係意識も、亦、國家的觀念も、次第に多く加味されて來るが、其の主要なる中心思想は等しく自己中心となつて居るやうに思ふ。然らば、小學校時代に於いては、自己中心と社會的或は國家的觀念乃至は他愛的感情は如何なる狀態に結合されて居るかを一言す

自覺を促せ

れば、尋常一學年より三學年位迄は男女共に、純粹なる自己卽ち身體的自己本位の道德であるが、四學年から義務敎育終了期、延いては、高等科になると、自己本位の道德意識は、勿論中心となつて居るが、斯の自己本位の思想に社會的或は國家的、他愛的の衣裳を纏はせ、表面的裝飾的なる意味の道德思想を其の特色とする處である。要するに、社會的意味や、國家的觀念乃至は他愛的感情の加味さるゝ度合は、其の兒童の生活範圍の擴大するに比例して進步發達するものである。

玆に於いて、吾々、人類の道德意識の發達は、自己本位の立場から現はれて、漸次、社會的、國家的、或は、他愛的に進むのであることが明かになつたが、更に飜つて、斯くの如き自然的發達を助長せしめ、且つ、完成せしむる爲めには、自己中心の立場をとらなければならぬし、又、其の立場にあつても、兒童の能力相當に、自覺を催すことが直接目的とならなければならぬ。幼少なる兒童に對して、自覺を促進せしめやうと云ふのは甚だ無理な註文のやうにも考へられるが、兒童生活に親しみ、少しく注意して居れば、左程、困難なるものではなくして兒童自らも好んで自分を知る處の興味も自ら起るのである。不心得なる敎師は、尋常一學年位の兒童に對しても、皆さんは、是れだけのことを自覺しなければならぬ等と云ふが、斯樣な云ひ方では、兒童の耳には物理的の響として聞えるだけで何等の意味もなさぬのであるが、自覺の言葉をやさしく、碎いて、皆さんは、自分の得手、或は上手と云ふてもよい、上手なこと或は下手なこと、好きなこと、嫌ひなこと、身體上の事柄を云ふならば、自分の體が弱いとか强いとか、歩くことが上手だとか或は、駈け歩きが速いとか緩いとか、手業が器用であるとか不器用であるとか、斯う云ふ具體的事實について、兒童自らの缺點や長所を覺らせることは、卽ち、是れ兒童相當の自覺であつて、道德生活の第一歩である。處が、從來の道德敎育は、最初に、德目を揭げて、斯く斯くせざるべからず、若し、かくせざればかくの如き制裁があると、云ふやうに、恰度、繪草紙にある魔王の前に立てる罪人が赤鬼靑鬼に責めたてられる

自覺の徹底

やうなものである。其れだから、道德意識を檢査する場合等所定の用紙に應答筆記する事柄は、實に立派なものであるが、いざ、兒童が自由の境地にあつて行動する場合は、實に言語同斷の所作をなすのである。斯くの如きは兒童の罪にあらずして教育上の缺陷である。兒童の生活を中心とし、兒童自らの缺點や長所を悟らしむるには、單に知的教授として取り扱つて居る場合よりも、運動場に於ける體操時間等の方が最も適切である。自分の體の弱いものは、他の兒童よりも早く疲れるし、又、氣立てのわるいものは、一目瞭然其の結果が現はれるから、兒童が誤魔化しをする機會が少ないのである。其れ故に、精神的にも、身體的にも、其の兒童各自の自覺と云ふことを中心として授けなければならぬ。斯くの如き態度で教授する場合には、教授者は各兒童に發育表のやうなものを作製して、精神的にも身體的にも、其の發育狀態を教師監督の下に記錄して置くと、其處に、自然の結果或る種の德目と云ふやうなものが現はれて來る。斯う云ふ方法で進んで行けば、從來、考へられた體操の目的としては從順であるとか、注意であるとか、勇氣であるとかそんなものは特に授けようとしないでも、其の根本となるものが兒童自ら自動的に接養されて居るから、必要に應じては、勇氣ともなり、忍耐ともなり、同情ともなり、思考斷定ともなり、臨機應變に何等の不自由なく現實してくるのである。

從來のやうに目的要項を規定してかゝる教授は、兒童に對して何んとなく窮屈な感じを與へるが、兒童本位の立場から自覺を進めると云ふことになると、兒童は頗る自由であるから、精一杯に活動し、非常に興味を持ち、自己一切の行動を自律的に支配するやうになるのである。斯の自律的支配の域に到着すれば、生理的に缺陷があつて、面白くないと思へば、自ら進んで矯正もしよう、例へば、不均齊なる發育であれば、均齊になるやうに人目を忍んで矯正もしよう、又、低骨で面白くなければ、優美の姿勢をも自ら進んで作り上げるだらう、健康を望む必要あれば健康法もとるだらう、色が黑くて、皮膚が疎雜で面白くなければ自ら化粧法も考へ美顏法も施すだらう、自己の心身に關する一切の事

柄は自ら進んで、解決する根本精神が形成されて居れば、學校卒業後と雖ども、各自適當なる方法に依つて、體育法なり、體操法なりを行ふに相異ない。其の證據には、青春の時期に到來すれば、誰れが敎へると云ふことなしに、それそれ身作りを考へ、姿見鏡の前に立つて、口を細くして見たり、目をひつ釣つて見たり、横顔を見たり、臀部を撫てゝ見たり、それは〳〵實に熱心な研究法を講じて居る。斯う云ふとは、他人から云ひつけられては到底出來ることではない。本能的に自然力によつて、自己の美を作り出す力が自己の内部から現はれて來るから、他人の目を忍びながらも行ふ程偉大な力があるのである。

一度、此の處に、想倒すれば、德目を標準として、授ける敎育や、生理的標準に照して敎師側から强ふる目的等は、實に、屁のやうなもので、兒童の本性的要求からすれば、鼻の先きを粕賣りが通つたやうなものである。この事實は、敎育的見地から見れば、兒童の自然的要求に應ずる敎授をなして、しかも、自然的發育を圓滿に發達せしむるやうに補導すると云ふことになるので、其の敎育的價値評價から見れば、自律的能力を涵養し、補導の要點は、自然的要求に同化せしめ、茲に、第二の天性として善良なる品性を形成せしむるやうになることである。

第六節　家族的目的

自己中心の目的觀念を補導する次の目的觀念は、家族的の目的觀念である。兒童の日常生活中、最も、親炙する世界は、自己一團の家族、卽ち、家族生活である。家族と云ふ言葉を嚴密に規定するには、先づ、民法上の解釋をも參照しなければならぬ筈であるけれども、兒童の道德意識の發達關係から見る立場としては、左程の必要をも認めないのである。其れ故、民法上の形式論の見地は避けて、兒童の意識的生活就中道德意識の發達關係を基準として考へようと思ふのである。

自己中心的目的觀念の段階にありては、主として、自己の完成を企圖するのであるが、偖て其の自己生活は自己自身のみの完全を以つて滿足し得るも

家族一團としての滿足

のではない。自分の名譽、自分の地位、自分の財力、其の他、あらゆる自己滿足を極むるにしても、それが、自己一身の榮であつて、自分の親や兄弟の境遇が悲運であつたならば、自分の境遇の繁榮なる程、悲しみの感、痛々しい思ひを抱くのは人情の常である。眞の幸福は、色々の意味にも考へられるであらうが、自分の榮達は勿論自己の近親の家族に於いても、共に樂しむやうな境遇でなければ、本當に幸福であると云ふ氣分にはなり得ないのである。

況して、お互は、自分獨りで、成人したやうな顏をして、威張つて居るけれども、どんなに偉い人でも、母の懷に抱かれ、お襁褓の厄介になり、時には、病氣もし、親は自分の身を忘れて、看護もし、神や佛にも願をかけ、自分の壽命を縮めても子の生命を救ひ上げようと云ふ愛の心に養育されて成人するのである。理屈で考ふれば、親の心程、矛盾したものは外にあるまいと思ふ。假令どれ程矛盾して居つても、子供は健康に成育させたい、子供の榮達を計りたいと云ふ一念から現ははれるので、實に親の心程尊いものは、この世の中に、二つとはないのである。女として纖弱なるも母としては猛虎のやうに強い、男としては鬼武者であつても、父としては、實に親しみ易いものである。世の中には仁者もあるが、親の情は、又、特別である。九死一生の場合、自身を忘れて盡す手助けは親だけである。平常無事の折は、甘言蜜のやうであつても、一度危急の狀態になれば頓と顧みないのが世の常態である。實に、親の恩は、自分が親になつて見なければ分らない。子を產んで始めて親の恩を知ると云ふた古語は眞に然りで、親子の情愛を遺憾なく云ひ現はして居る。

又、兄弟の親しみ等も亦特別のものである。同じ骨肉を分けたもので、世間多くの人は親しみ易い處から、能くも、兄弟名乘りをして交際して居るけれども、一朝事件が起れば、今迄兄弟名乘りして居た其の人同志は、仇怨の人となり、犬猿の間柄となるのは、珍らしくはないのである。處が、兄弟は、平素事もない時には、喧嘩もしよう、爭論もしようけれども、いざ、不幸の場合に遭遇

すれば、平素、兄弟よりも親しく交際して居つた其の人は見向振りをするし、喧嘩して居た兄弟は、自身の災厄のやうに思ふて共に力を添へるのが兄弟の間柄である。裂い　も離しても、血筋の切り得ない處に人情の機微が現はれる。或る人の話しによれば、平素は親よりも兄弟よりも親しく交際して居つた一人の友人が、或る時、偶然に、友人の兄が上京して別室で話し合つて居るのを聞いて居つたと云ふことだ。互に兄弟名乘りをして交際した友人は、眞の兄に接する話し振りを聞いて、つくづく感じたと云ふことだ。よしや名乘りをして兄弟の誼を結んでも、血の判を押しても、眞の血や肉は各々別々であるから、何んと云ふても、眞の兄弟とは自ら異なるのである。兎に角、一家族一團の生活圈內には、到底謂ふに謂はれない溫愛の情味が交通して居るのである。

殊に、我が邦の如き二千五百有餘年の長い歷史は、一大家族として發達し、國民一般の氣風も、この家族制度によつて大に培養せられ、國粹の精神は此の處から現はれたのである。斯くの如き立派なる國民精神の團結は、世界廣しと雖ども、他には見ることは出來ないのである。最も、世界の諸列國は、我が邦に優れて居る種々なる特長もあるが、所謂、吾が國體の精華の點については、實に、誇るに足るべきものがあるのである。

或る國にあつては、自分の祖父の墓は何處にあるやら、知るものは少數であると云ふ程無頓着であるが、我が邦の如きは、祖父の墓位ではない、幾百年前に葬つた、祖先の墓も確かにして、先祖代々の回忌には、時違ふことなく祭祀して、一家親類寄り集り共に墓參をして、在生中の物語りをするのであるから、其の都度、一家一族の現在生活の中には、古き幾百年間の歷史は、宗教教育の型を辿つて吾々に教訓してくれるのである。又、他の家から到來したものは、必らず、佛壇の位牌に供し、祖先の靈を慰め、共に分つべきは分ち、藏むべきは藏むるのであるから、祖先と云ふことは非常に吾々の腦中に深く刻み込まれて居るのである。

處が、最近に於ける傾向は、古來の家族的情味交通の最も貴い家族的精神を

破壞しつゝあるやうに想ふ。斯う云ふ傾向は、世の文運發達のため致し方がないからと云ふて放棄して置くべきものではなく、古來の家族制度中新傾向に不一致な點は改良するもよからうし、又、其の取るべき最良の精神は、何んと云ふても、取り上げて、保存しなくてはならぬ。此の批判を試みて然る後に、國粹の精神を益々發揮せしめなくてはならぬのだ。けれども、言ふは易く、行ふは是れ難しの古語のやうに、吾々自身と雖ども、古氣質のやうな、至純至愛の家族的情味は或る程度迄破棄されて居ると思ふ。是れは、無理もないので、人間の情愛は、一面から云へば、去るものは、日々に疎しと云ふやうな離れ易い傾向もある。遠くの兄弟よりも近くの他人と云ふやうなことは、感情の一面を確かに實證して居る。又、今日は、自己の自申なる發展をなし得るのであるから、土地に境界なく、よしや、田舍の百姓に生れたものでも、自分の勉强次第で、一國の首相として、天下國家を左右する地位にもなり得るのであるから、從つて、青雲の志を抱き、故國を離れ都下遊學に出てゝ來るものや、又、生計上の

切迫から諸々方々、流浪するもの等、古き昔の時代よりは其の割合が非常に多くなつたのである。一度故國を出て、錦を着て故山を觀るは心よしとするも、襤褸見る影もない姿は人目にさらしたくはないから、自然、生れ在所とも遠かり、祖先の祭祀をもなし得ぬやうな狀態になるのである。

更に、大に成功し、社會に於ける一大明星として輝く地位を得た人間でも、故郷の空には、唯、當時の自分を紹介する手段として、鎭守樣に寄附もすれば、村人を集めて振舞ひもするが、眞に、生れ在所の恩愛を感じ、故郷の空に入り、第一に、自分の祖先の墓に詣で、氏神を禮拜し、祖先の祭祀をしてから、村人を歡待するやうな眞人間幾人かある。世は段々に人情輕薄となり、一切合切皆其の、ためにすると云ふ心底から出てゝ居るやうに思はれる。勿論、中には、隱れたる志士仁人は數多くある。けれども、斯う云ふ人は、數に於いて極めて少ないから我が邦の今日は餘程注意しなくてはならぬ。

家族制度廢滅は當然來るべき運命であらうけれども、家族的精神は廢滅すべ

家族精神の勃興

きものではない。否、廢滅せしむべきものではない。古來、我が邦の家族的精神は、あまりに順調に發達して來たから、輓近に於ける事情は、中々の痛手である。聊か、戸迷ひの姿である。國粹保存の一天張りに立つて居れば、それは、內から破れるし、さりとて、歐化してしまへば、外から崩壞して來る。この調和は、如何にすべきであらうか、學者、宗敎家、爲政家、特に敎育家は最も注意すべき重大事件である。近頃の子供は、親の前をも憚せず屁をひつてしらぬ顏をして居るとは、能く人の云ふことだ。そんな事實の眞僞は、どうでもよいとして、自由思想、民主思想の喧囂なる昨今、各個人の眞底には、恐るべき叫びが蟠つて居ることを、子供だけに無邪氣に、正直に、表現した、代表的表徵とも思はれるのである。

時代の思潮は、滔々として、自由放慢の域に進達しようとして居る。この場合、よしや、子供であるからと云ふて、壓制强迫して、それ親に孝行をすべしだ、祖父さんや祖母さんには叮寧にしなければならぬぞと嚴命したり、兄弟仲

よくせよと八釜敷云ふた處が、其の子供の心は、最早、こんな處には少しも耳をかさぬと云ふてもよい。そんなことは、遠うの昔の世迷ひ言だと云はぬばかりに聞き流すのが當世風だと見てかゝらなくてはならぬ。是れ程、世の中は、變轉して居るから、敎育者は須らく斯の點に着目して、兒童自身の內心から、本當に、自分は、斯うして、每日學校で勉强して居るのも、家庭の親や、兄姉のおかげであると云ふことを覺らして、しまへば、兒童自らは、其處に、非常に責任を感ずることになる。今迄は、自分勝手に喜んで居ることばかり考へて居つたけれども、我が儘を云ふてはならぬ。若し自分の體が病氣にでもなればそれこそ、親や兄姉は、どんなに心配するかしれない。どうしても、自分の我が儘を凝らして、養生もしなければならぬし、又、節制もしなければならぬ。そして、不斷の仕事も、元氣よく、手早くしなければならぬと云ふやうな覺悟を持たしたならば、それは、生命のある、しかも、永久持續の力强き根柢から出た德目が華として現はれたので實に麗しいものである。

これ迄のやり方は、高飛車的に、高壓的に、それ、均齊だの、調和だの、機敏だの、注意だの、忍耐だの、勇氣だのと、金看板を竝べて兒童に接するから、兒童は、厭氣がさして、反情を現はすのだ、勿論、今日の教授とても、全部斯う云ふやり方であるとは云はないが、大體の傾向が、高壓的であつて、兒童の內心から湧き出させるやうな點が悉く缺けて居ると思はれる。其の證據には體操の時間には、一系亂れず規則正しい兒童であつても、其の時其の場限りで、他の自由なる天地では、全然、別の兒童であるかと思ふ程、不規律で、不行儀で、强いて云へば、惡童であると云ひたい程である。體操時間中は善童で、其の他の場合に惡童であつたら、教育上の效果は何處に認められるか、教育せんがために、却つて、不良の躾けをするやうになるのである。

第七節　國家的目的

お互が自分の體が健全であれば、自分の氣分は何時も爽快であるから從つて、其の日を暮すについても、誠に愉快に過される。巨萬の富を積み、位人臣を極むるも、體が虛弱で、何時も病人の絕ゆることないやうな家庭は、何んとなく、一家族中の空氣は陰鬱であつて、笑聲の一つだに聞くことも出來ぬやうな有樣で誠に不愉快なものである。吾人々類は、自己單獨のやうに考へて居るけれども、其の實は、決して、單獨なる生活をなし得るものではない。孔夫子は、君子は孤ならずと云ふてあるが、君子と謂はるゝ崇高なる人物ばかりでなく、愚夫愚婦に至る迄、必らずや孤獨なるべきものではない。最も手近い處の關係範圍は、家族的關係であるが、偖て各家族一團となつて一の國家を組織するのであるから、一家族に不健全なる者あれば一家族不愉快なるが如く、一國家としても、亦、不快の日を送らなければならぬ。唯、手近に見る事柄と、廣く考へて、目に見えぬ事柄との相違だけであるが、事の道理は同じとである。一家の榮えは、全家族健康であつて、夜を日に繼き精々働き快き一日一夜を送る處にあるのだ。一國家の繁榮も、亦是れと同樣の理で、お互は、何處の隅でどんな病人や不良の人間が何をして居るか、少しも知らずに居るが、各自銘々、

よく、注意して、自分の爲すべき務をなし、餘念なく、仕事をするやうにすれば、其の國家は實に健全に發達して行くのである。吾々は、國家の發達云々と能く口には云ふけれども、偖て其の場合、自分を反省することを忘れて居る。國家と云ふ特別の存在物があつて、自分は、其の特別なる國家以外の人間のやうに考へて兎角の批評を下すのが吾々人間の恐るべき弱點である。天下、國家を論評するもよい。必らず、批判的に觀なければならぬのであるが、其の時には、自己を內省して、篤と考へることを忘れてはならぬ。國家の存立は、土地あり、人あり主宰者ありて始めて成立するのであるから、吾々個人を拔きにして、日本國家と云ふものは、決して存在しよう筈はないのである。吾々は、實に、日本國家形成の要素であつて、實に重大なる意味を持つて居るのである。其れ故に、若しも、吾々一個人が、この重大なる責任分擔を忘れ、物數なら童だ等と自ら卑下するやうなことでは、決して、上、一天萬乘の至尊に對し奉りても忠良の臣であるとは謂ひ得ないのである。

楠公父子が櫻井の驛の袂別、其の形を今の世に於いて行ふとした處が其れは不可能である。强ひてやつた處が、それは芝居であつて、楠公父子の聖靈は籠つて居ないのである。楠公父子の聖靈は、一言以つて云へば、あの當時、自分のなすべき任務が、あのやうにしなければならなかつたからである。自分で、能く〳〵、考へ、是れが當然なすべき自分の任務であると堅く〳〵信じた、其の精神を貫徹した處に、楠公の聖靈が籠つてあるのだ。人は、死を避け生を欲し、生中樂を欲し、樂しみも亦靈のそれよりも、肉を欲するのが人情の常態である。然るに自己の生を捨て、晏然として死につき、猶且つ再擧を企てよと、幼少なる正行に命じて、赤誠を全うしたる其の心中には、水火も冒かすべからざる金鐵の如き大覺心が、明かに見え透して居る。斯の心を心として、吾々は、日常自己の當然なすべき任務をなす處に、楠公父子に劣らぬ忠良の心が宿つて居るのだ。若しも、自己の任務を打ち忘れ、徒らに其の日を過すならば、自己を僞り、人を僞り、天下國家を害する不忠不義の臣となるのである。

誠意、正心、修身、治國、平天下の五段の修德法は、其の意種々に解說せらるゝであらうが、說明の都合上、修德の順序を縱列に見たので、其の實は、誠意にして、自己の任務を心持ちよく仕遂げるならば、それは、治國の道に相當し、又、天下泰平、世界人道のためにも、貢獻する處のものである。要するに、忠良の臣たらしめんには、僞らざる自己の赤誠を吐露して、自己の任務を仕遂ぐる處にあるのである。斯くの如き、自覺を持つた、國民が多數あるならば、其の國家は期せずして榮へ、世界列强の諸國に伍して、少しも憶する處はないのである。

至尊の御仁德

幸にも、吾々、國民は、萬世一系の天皇を戴き、國民を見ること、父母が子に對するが如く、大御心を以つて慈しみ給ふ御事は、御歷代の天皇の然らしむる處である。

仁德天皇が、高殿に登らせられて民狀に御感あらせられた大御心は、吾々國民にとりては、何んとも云ひ得ぬ有り難い感を味ふことが出來る。四海の內皆是れ同胞であると云ふやうなことは、我が邦の如き大家族關係に於いて始めて眞に味ふことが出來るのである。

國家御統率の大慈眼から見れば、國民を愛することに於いては、實に四民平等である。假令、九尺二間の裏長屋に住んで居るものでも、亦、非人乞食のやうな物の數にも入らもぬのでさへも、愛の目には、等しく映るのである。併しながら、一家に秩序あるが如く、一國の制度にも、亦、秩序なくてはならぬ。此の秩序を保持するためには、玆に、四民の差別が自ら出て來るのである。此の差別は呉れ〳〵も云ふておくが、偏頗な愛と云ふことではない。非人は非人として相當な、なりふりをしなければなるまい。乞食は乞食として又相當な、生き方をして居るのを、强ひて、救ふた處が、乞食本人の心から改心しなければ、人間の生活振りにはなり得ぬのである。乞食が一片のパンに甘んじて道端に一睡の夢を結ぶのも、彼の大統領が、ホワイトハウスに枕を高ふして睡るのも、是れ相當な生活振りであつて、決して不平不足はないのである。けれど

も、廣い世間には、所謂逆境の人がある。何等能のないやうな人間であつても、立派な社會的地位を占めて居る人間もある。此の點を見ると、吾々は、社會制度、卽ち國家組織其のものに對して、不滿を感ぜずには居られない。誤解のないやうに、よく〳〵云つて置くが、國家統率の大任を司る至尊の大御心に對する不平不滿は、苟も、神州の民として自覺するものは唯の一人もあらう筈はないが、政體卽ち、政治運用のため、國家の制度に於てほ、大に改革する必要のあることは云ふまでもないことである。

國民生活の自覺

吾人は、進歩發達の過程を辿りつゝある國家を建設して居るのだから、國家制度や、行政上の事柄に對しては種々なる不平不滿は事實に於いて持つて居る。斯う云ふ種類の不平不滿は國民全般に持たせなくてはならぬ。不平のない處、不滿のない處には、最早理想はないのである。理想が消えてしまへば、現在にて、大いに滿足し、實に完成せんと、鼓腹謳歌して時の移るをも知らずに居る、斯くの如き狀態になれば、最早、日は西山に沒せんとする悲哀の情調が表現されるのだ。其れ故に、進歩的國家には、必らずや、不平を抱くものが多數であるに相違ないのである。昨今我が邦の如きも、デモクラテックの思想に對して、防衛戰をなして居るやうであるが、國民生活の根柢には、一度自由を許さなければならぬやうな狀態になつて來たのは、何んと云ふても之れを防ぎやうはないので、强ひて、之れを防がんとするならば、洪水は、忽ちにして、氾濫して、恐るべき害毒を釀すに相違ない。何んとなれば、吾々、國民として、國家的活動をなす場合に、眞劍になつて、事の成功を努むるには、自己の心中には、眞に自由の天地を描かなくてはならぬのだ。斯の事を、斯く〳〵すれば、世間の人に、斯く〳〵思はれはすまいか、あゝしたら、妙に思はれはすまいかと、右往左往、適從する處を知らぬやうな事態に陷り、結局、鼻息を窺ふ奴隷となつてしまう。他の社會は、暫く別として、苟も、教育社會にあるものは、自分の冷靜なる理解に基づき、自己の責任範圍の極限を決定したならば、其の範圍内に於ける所の活動は、最も自由に何等の拘束を苦慮せずしてどし〳〵進むべき

である。若しも、自分の考へを捨てよと云ふならば、五體の生命を捨てゝも、自己の主張を捨てぬと云ふやうな强烈なる健全思想を持ち情操を守つて居るならば、教育者として、生命を全うするのみならず、國民として、將又、國民生活として實に、好模範とすべきである。

謂ふ迄もなく、デモクラシーの自由と云ふ思想は、政治的意味から出來して居るから、吾人の所謂、自由とは其の意味が自ら異なるけれども、吾々は、國家制度の不完全は、永久につき纏つて居ると思ふから、そんなことは、政治を商賣にして居る奴輩に一任して、吾々、教育した人間からは、一人でも、半かけでも、そんなつまらぬ人間を出さぬと云ふやうな、堅實なる、しかも、積極的なる考へを以つて、先づ、自己當然の責任範圍なる教育に沒頭して、殆んど寢食を忘れて、やつてのけるならば、尠なくも、學童の間には、偉大なる感化を與へ、よしや？豫期の半數としても、殘る半數は、其の堅實なる思想の幾分を持つて、社會國家に打突かるのだから、腐敗分子は、うか〳〵して居られないやうになる。其處迄進んでくれば、我が日本國も一段の進歩であつて、眞の生氣に富んだ國柄となるのである。

近時、デモクシーと教育と云ふ事が、朝野の間に、絶叫されて居るが、こんなつまらぬ問題を苦慮して居る日本の今日であると思つて居るのが抑の間違ひである。本來、人間には、能力が差別的に出來て居る。人間許りでない。自然界の萬物皆差別的に形成されて居るのが、造化の妙理である。差別的能力のものに對して平等と云ふ要求、（若し、能力に應ずる報酬の意味で）は、全然、駄ッ子の要求である。若し又、物質的平等の意味であるとすれば、自分の財布に千圓入れてあるが、他の財布には五拾錢しか入れてない。其の時、甲と乙、見ず知らずのもの同志が、オイ、君、財布の共同をやらうと云ふた處が、五拾錢入りの財布の奴輩は喜びもしようが、千圓入れてあつた方の奴輩は、何んと云ふか、況して、甲と乙と、永久に一所に生活する場合であれば別だが、全世界を引き括つて、平等だ何だと云ふのは、少しも意味をなさぬ、斯くの如き、つまら

ぬ平等をやれば、寧ろ自由を拘束して來る。甲と乙と、二人で一所の一の財布であるから、何時でも、甲乙二人で歩かなければならぬ。雙子ではあるまいし、こんな阿呆、戯氣たことは、何等の考へもない奴輩等の世迷言に過ぎない。吾吾が、眞の自由を得ると云ふことは、二人で一つの財布を持つよりも、獨りで幾つもの財布を持つて、五錢と云へば、五錢入れの財布を、拾錢と云へば、拾錢入れの財布を、何等の苦慮もなく、どん〳〵出して、時間を出來るだけ手短にして、しかも、數に誤りのないやうに出し入れすることが出來るやうにするのが自由である。斯くの如く、觀じ來たれば、物質的にも精神的にも、同樣の考へが成り立つので、又、政治的意味としても、眞の自由を得ると云ふことゝ平等と云ふことゝは、若しもそれが同一立脚地ならば兩立しないのである。

元來、人間の能力は、各〻異なるものであるから、それを一纏めにして、政治を行ふ場合には、其處に多少の讓りあひがなければ、纏りがつきやう筈はない、僕は學者として、人知れぬ苦心をして居るにも拘らず、月給、僅かに、貳百圓だ、處が、隣りの相場師は、自分の名さへも碌々書けずに書生にかゝして居る癖に、自働車に乘り込み、勝手な普請をして、近所の迷惑を考へずに居る不都合千萬だ、能力相當の報酬を要求すべきものだのに、政治運用の手段がわるいからと、不平を云ふた處が、相場師の方では、學者は氣樂なものだ、朝から晩迄、机の前に座り込んで、お經を讀むでもなし、居睡りでもして居るのか、身動きもしないで、たまさか、出たかと思ふと、晝過ぎに歸つて又座りづめだ、誠に氣樂なものだが、あゝ云ふ人達から見れば、僕達等は、恁うして寢て居つても、中々心配で、小便の色が變る程考へて居るから、もう少し、儲かるやうに政府當局も考へてくれてもよかりさうなものだと、學者と相場師とは、互に自分の報酬が不足であると不平を云ふて居るやうな事實は、到る處にある。こんなつまらぬ不平を一々取り上げて居つたならば、何時になつた處が、鳧りがつくものでない。けれども、學者當人、相場師本人の心中から云へば、斯の境涯を脱して自由平等の域に進みたいと要求して止まないのである。國家として

は、勿論、斯う云ふ細密なる要求にも應ずるやうにするのが、所謂民福を計ると云ふのでもあらうけれども、如何せん、大多數の人間を取り扱ふ、統一的見地から見れば、萬人悉く滿足するやうには中々出來かぬるであらう。否、出來ぬのが、當然であつて、出來るのが變態である。出來ぬやうにしなければならぬのである。併し、それは、爲政家が、怠慢して出來ぬと云ふてはならぬが、汗水搾つて考へた末最良の方法だと思ふ施政方針の下にやつても國民は滿足しないと云ふのは、國民の發展から延いて國家發展の瑞兆である。此の意味からして、吾人は、自由とか平等とか云ふことは、國家其のものゝ運用によつて、與へられるのを待つて居るやうな乞食根性でなくして、自分自らの中に求め、而して、此の當局者を指導してやるやうな態度をとらなければ、國民的生活は充實して來ないと思ふ。

けれども、國民一般の思想は、斯の處迄、今日の場合自覺して居ないから、先づ教育者自らが、爰に着目して進まなくてはならぬ。又、民主思想の如きも前述同樣の問題として取り扱ふとが出來るので、各個人が國民的生活の根柢に想倒し自己の分限を自ら覺り、充實したる國民思想を涵養するとに於いては何等苦慮するに足らぬ問題であると思ふ。併しながら、我が邦の前途大いに考慮を要すべきは、對外政策である。世界の今日は、內治の問題は、どし〳〵片つけ、對外的に活動する時期になつて居るのである。一家の主人が、朝から晩迄、家に引き籠り、勝手下から、便所の隅迄八釜敷世話燒いて、下女を押し使つた處が、一家の積極的活動には糞の役にも立たぬので、下女は、下女として、自己の任務を盡し、妻は妻としての務を盡せ、言葉に迄頗る簡單にして、要領を得、其の他は、社會的活動に時を費すやうでなくては一家の繁榮は勿論、價値ある生活を營爲することは出來ぬと同樣、國家の施政方針を確立し、內治としては國民之れをなすべし、の、簡單なる意味にて足れりだ。國民は、之れ奉じ、國民としてなすべきには自ら進んでなすべし、斯くして、國家の主力を對外活動に盡すことに於いて、始めて、日本の眞の繁榮は期待し得るので

あるから、教育者は、國民思想を涵養するにしても、自立自營の習慣を作り、學童の教養は、外から強ふることなく、內心から、自發的に湧き出すやうにしなければならぬことゝ思ふのである。

個人對國家の關係

個人對國家の關係は、其の成立する狀態から考へて見れば、勿論有機的のものではあるが、又、其れを成立したる狀態から考ふれば、對立的にも考へられる。國家は國家としての存在を有意的に活用して居るし、個人は、個人として存在的價値を運用しなければならぬ。此の見方は、常識的であつて、誤つた考へであることは勿論であるけれども、萬人が萬人迄、日常生活の壓迫をこうける場合は、必ず國家を仇敵として罵倒するのは共通である。斯の場合に、若しも、國家てふ其のものは、自分達が、其の一部分を形成して居ると云ふことを考へたならば、最近に於ける米暴動の起りやう筈はない。それは自分自らにも物價を暴騰せしめた其の責任の一部分は分たなければならぬ。暴動を起すと云ふよりか寧ろ自ら恥ぢて何んとか之れを穩當なる手段方法を以つて解決しようと云ふことに氣づかなければならぬ筈である。處が、國民一般の國家對個人の關係に對する責任觀念は實に幼稚なもので、極めて皮相淺薄であつて、恰度、强度の近視眼者のやうなものであるから、兒童が自己自らの內心から湧出した國家觀念を基礎として、更に、此の責任觀念をも、最も堅實にしなければならぬことと思ふのである。

健康保險と生命保險

吾々が、自己の身體を健康にしなければならぬと云ふ此の理由、卽ち根本的原因を國家的に考へるやうになり、其の觀念から現はれる國家的責任觀念を以つて、自己內心に、平等、自由、と云ふやうなことを積極的に解決するやうになつたならば、其れから先きは、更に一步進んで、其の觀念を具體的に現はし、個人と國家との調停を計るには、どうしても玆に吾々の健康を保證する責務行爲と云ふものを營爲しなければならぬ。それは、自己の身體を必らず健康に保持し、國家にも將た自己一身に對しても、生の存續を保全すると云ふ自己の意志的表示であると思はれる、今、假りに常套語を以つて謂ふならば、自己の健康を

保證するために、所謂、保險制度を設けなくてはならぬ。例令今日行はれて居る彼の生命保險のやうなものは、國民義務教育をうくる兒童に對しては、其の保護者なるものが、其の生命を保險するだけの義務を附帶して、それは、學校內の一の仕事として一所の時期に取り扱ふやうにすれば、從來の如き保險組織とは異つて非常に意味が出てくるのである。其の意味を今簡單に云へば、修身教育に於いて自己の身體に對する義務の一項目中にも相當するし、又、身體を直接取り扱ふ體操科に於いても最も重大なる關係要目の一つになる。そして、家庭の人々學童との關係によつて、體育的事實は、有意的に重んぜられると同時に、個人と國家との關係も一層密切なる結合を締結することになるのである。要するに、學童が、個人的にも、亦、國家的にも、自身の身體的健康を促進しなければならぬ々云ふことが自ら自覺されて來る。此の第一原因から導かれて、身體要件に對する慾求は今日より以上盛んになるから、其の動機も今日より以上擴大せられ、且つ又、深みに入りたる根柢を有することになるのである。加之、日常生活の事實とも結合して、所謂、理論と實際とは、混一無二の狀態になるのである。

社會の意義

第八節　社會的目的

吾々が、日常使用する言葉には、分つたやうで、其の實は、中々分らない言葉が數多くある。玆に謂ふ社會と云ふ言葉なども其の一種である。お互同志に、社會が、どうのかうのと云へば、左程說明を要する迄もなく、其の意は相通ずるが、偖て其の社會とは、如何なる意味のものを指すのであるかと云ふことになると、中々、難題であるから、順序として先づ其の意義を大體明かにして、次に、其の目的とすべき所以を論究してみようと思ふ。

社會と云ふ觀念を定義的に決定するには、社會學上種々の學說があつて容易に確定し難いのであるが、併し、今の場合は專門的に論究する必要もないから、其の意味の方面から出發して、大體廣狹二義に區分して、其の觀念の大要だけを闡明して見ようと思ふ。

古代希臘の大哲アリストートルは、人は社會的動物であると說破した。實に吾人々類は天賦の性能として、他の動物に見ることの出來ない特有なる社交性を持つて居ることは吾々の日常生活に就いて考へても明瞭なる事實である。今其の一例を云ふならば、平素、繁雜なる時には、忙しさに倦きて、少し山間にでも入つて靜養しようと思つて、彌々、閑散の生活をやつて見ると、精々、一週間か二週間位は、閑散靜養の樂しみも味つて居られるが、暫時にして、又、倦きが來て、到底堪へ切れなくなるのは、萬人共通のやうである。又、文通の往復が、うるさいからと云ふて、成るべく避けて居る人もあるが、それも、長くは續かないので、間もなく、繁雜なる交際を續けるやうになるのだ。或る人の話によれば、二ヶ月間一切交通を遮斷した處が、自分は社會から葬られてしまつたやうな氣がしたと云ふ告白談を聞いたことがある。又、其の反對に、自分は何等なす處はないにしても、自己を社會的に廣告して、何某は、やつて居ると云ふことの存在を明かにするために、努めて、あらゆる會合にも出席し、其の都度何か其の席上で話しをすると云ふ方針でやつて居る人もある。以上の例は、頗る消極的なる穩逃的態度をとつても、中々社會的性能ある以上は、容易に社會と離れることは出來ないと云ふ方面の事例と、積極的に、自己廣告をやつて、自己の存在を社會的に認めしむる方面との事例であるが、何れにしても、お互人類は、一種の社會性を持つて居ると云ふことは疑ひもない事實である。

斯くの如き社會的性能は、吾々の精神界に內在して居る最初の姿は、卽ち、社交本能と云ふ狀態になつて居るが、此の社交性が一旦外界に現はれる時は、前述の事例のやうに、社會生活卽ち共同生活或は團體生活と云ふことになるのである。社會と云ふ意義を極めて廣義に解釋すれば、卽ち、斯くの如き意味の社會を綜縕して謂ふことになるのである。少しく詳しく謂へば、社會とは、吾人類相互の思想や風情の影響或は物質の交通の行はるゝ人類界の結合體を綜合して謂ふことになるのである。斯くの如き意味から考ふれば、假令、吾々が、地位の相違あるも、國土を異にしても、人として生存して居る以上は、等しく

社會と謂ふ同一範圍内に包含されてしまうのである。假りに、國家と云ふ觀念と對照して考へて見ると一層明かになるが、國家と云ふ場合には、必らず一定の土地あり、人民あり、是れを統率する主權と云ふものがあつて、始めて國家と云ひ得るのである。處が、社會と云ふ場合は、土地とか、人民とか、主權とか云ふものは、なくてならぬ必要條件ではない。唯人々が一種の結合體をなして生活して居る狀態を概括した處の意味であるから、國家觀念とは著しく相違が生ずるのである。併し、現今の社會學其のものが、未だ非常に幼稚なる程度にあるから、純粹なる意味の科學として成立せしめ得るかどうか現に問題であると云ふ狀態であるから、國家と社會との區別についても、未だ判然しない處は尠ないやうであるが、廣義に見るならば、前述の如き考へを以つても、敢て支し閊へはなからうと思ふのである。

次は、狹義に於ける社會とは、如何なる意味を持つて居るか一應吟味しよう。其處で、廣義に於ける社會の意義を中心として、考へるならば、先づ、吾々の思想感情の影響と云ふことが大切なる條件になつて居つたのであるから、此の點に據つて考へて見ると、吾々の日常生活としては、隣里鄕黨は、思想感情の交錯する處最も周密なものである。其れ故に、其の關係交錯の一番濃厚なる程度のものを稱して、一の社會團體であるし、猶ほ廣く云へば、人類全體を綜合しても一の社會團體と云ひ得るが、狹義の場合は、人と人との相互關係の密度から見て其處に制限をつけて、其の制限内を稱して一の社會團體と云ふことになるのである。其れ故に、學者社會であるとか、敎育者社會であるとか、實業家社會であるとか、宗敎家社會であるとか、種々なる社會が現はれて來る。斯くの如きは、畢竟、職業によつて分類し、生活狀態の稍々同一樣式であるものを色別した社會であるから、極めて狹義の社會である。以上は、社會の觀念を意味の上から、廣狹二義に區別して、其の大要だけを明かにしたのであるが、偖て其の社會は、如何なる原因によつて、起るものであるかを、一應吟味しなくてはならぬ。

社會起原

社會起原――偖て社會は、何う云ふ理由によつて現はれたものであるかと云ふことを考へるには、色々の方面から考察することが出來る。第一には、人間の內的に活卽ち、精神活動としての社交性を吟味して玆に出發點を据ゑて考へることも出來る。第二は、現存して居る社會團體の保持、卽ち社會の安寧秩序を保つ上から考へて行くことも出來る。前者は、心理學的基礎を出發點として居るので、後者は、社會的政策を根柢とした出發點である。第一の出發點から見ると、社會起原の最も根本的なる解釋は、遺傳と境遇との關係によつて、社會現象が出來すると見ることが出來るし、第二の見地からすれば、現在の社會卽ち、吾々が現存して居る社會狀態は、廣狹何れの意味にせよ、人々相互の間に、正しき秩序、安心の出來る保護と云ふものが設備されて居るが、斯くの如き秩序や保護機關は、世が文明に進むに從つて發達したもので、原始民族の間には、今日の如き、社會的秩序もなければ、保護機關もなかつたのである。詰り、人間は、人間以外の他のものと對抗して優勝劣敗の競爭をしなければならぬ時代があつたのである。假令、人間が住んで居ると、猛獸が、襲來して、自己の生命を失ふやうになるから、其の危惧心から必然的に一種の防衞策を講じなければならぬので、類を以つて集ると云ふやうに、玆に端なく、人と人との結合を來たしたのが、社會起原の狀態であるとも考へられる。要するに、斯の時代は、人對自然の競爭であつた。處が、稍々進步して來ると、自然を一先づ征服して、彼の恐ろしき猛獸の襲來も左程懸念することのないやうになると、今度は、別の形となつて、生存上の競爭が起つて來た。是れ卽ち、第三の起原論となるのである。

卽ち、猛獸等に襲はれた時代は、人と云ふ人、悉く、一致團結して猛獸に對抗したが、今度は、人と云ふ仲間のうちで自己の同一種族だけが分離して、特別の發展を企つるやうになつて來たから、種族間の競爭と云ふことになつて、自己の種族保存と云ふことが極力主張せらるゝやうになつたのである。此の考へは、色彩の上では、一原因時代と、今日とは餘程異なる點もあるが、種族間

の爭鬪は依然として現はれて居るのである。假令、今日の思想界としては、最も進歩したと謂はれて居る民族自決主義等は、等しく同一種族の提携一致を必要條件として居るのを見ても、中々容易に各民族平等の域に達した社會の建設は形成されまいと思ふ。

次は、社會現象の起因をば、知識交換の必要に切迫せられた結果、自然的に結合されたものであると云ふ見方である。斯くの如き見解も、素より一應の理由は認められる。如何に原始時代の民族であつても、人間であるから理解力の發達程度は、よしや低級であつたにしろ相當の發達を遂げて居つたに相違ないと思はれるから、斯くの如き起因説も一概に否定することは出來ない。併し、以上列擧しただけの其の一、二だけを以つて、社會起源の原因であつて、他は間違つて居ると考へるのは、それは、少しく、公平を缺く處の考へであると思ふ。吾人は、前述せし、一切の諸説を悉く綜覽して、其の何れを否定するかを考へるよりも、其の綜覽した中心となるべきもの、換言すれば、此の根本となるべきものを考へたいと思ふ。第一の場合の如く、猛獸相手の如きも、又、種族間の競爭の如きも、知識交換の如きも、其れは、特殊の必要條件であつて、其の條件を統括した最も根柢には、何ものが伏在して居るかを考へて見たならば、自ら判明すると思ふ。各人が、自己の生其のものゝ完成を期する處の慾求があればこそ、猛獸と戰ひもする、又、種族間の爭鬪もする。知識の交換もするのである。若しも、人間が、生其のものを離れて、しまつたならば、其の慾求も起らなければ、活動も起りやうはないのである。斯の意味からして、吾人は、社會の起原も、生の慾求に依つて現はれたものであると考へるのである。此の意味より社會を(廣義の社會の意を嚴密に定義すれば)定義すれば、人類が生の慾求を客觀化した狀態を社會と謂ひたいのである。

前述せる如く、社會起原については、種々の見解があるけれども、其の根本的なる原因と云へば、生の慾求其のものである。而して、斯の生の慾求は、如何なる形に於いて現はれるかと云ふことは、取りも直さず、社會發達の事實を

吟味することになるのである。詳しく論究すれば限りもないが、茲には其の極めて大體を述ぶることにする。

極めて、原始的なる社會現象は、すべての組織は單純であつて、各個人間の關係聯絡と云ふことよりも、各個人は、各自、自己の生を保存する必要の上から人間以外の外物に對抗することを以つて主とする處の社會現象である。斯の場合は、各個人の身體的強健其のものが最も大切であつて、精神的方面は比較的閑却されて居る時期である。其れ故に、協同一致の團結力は實に微弱なもので、外界の强敵が取り除かれた場合には、忽ちに仲間喧嘩をすると云ふやうな社會狀態である。詰り、各個人が自己の能力をば自覺することなく個人萬能を氣取る時代である。更に、進歩しては、各個人の生を保持するために、其の幾分づつは護歩もし、亦、我慢もすると云ふ微かなる自覺が現はれると同時に、各人の生の慾求する內的活動は、端なくも、一の定業を見出さねばならぬことになつて來たのである。各個人が定業を考へるやうになつて來ると、其處に、分業と云ふことが現はれて、一個人では何にもかもすると云ふことが至難であると考へるやうになつたのである。斯の分業の現はれは、卽ち經濟活動の根本であつて、各人の精神活動が著しく發達した處の唯一の實證と見做されるのである。此の時期に於いては、從來よりも、各個人間の一致團體が餘程精神的の聯鎖を以つて結合せられ所謂協力時代となつたのである。

更に、進歩した社會に於いては、社會組織を形成し、其の組織に對する自覺を持つやうになるから、茲に、政治的統一を見出すことになる。是れ卽ち、政體の現はるゝ所以である。此の時代に到れば、彼の英雄崇拜と云ふ觀念は、頓と取り去られ、萬機公論によつて決定する、と云ふ議會制度が現はれて來たのである。議會制度が設けられ萬機公論によつて決定すると云ふことは、是れ卽ち、各個人の人格を充分に尊重する處の意味を　明するものであつて、各個人は、自己單獨なる存在ではなくして、一社會は悉く有機的關係を以つて組織して居ることをも亦自覺するやうになつたのである。此の域に迄進歩すれば一個

人は、單獨獨立の存在體ではなくして、自己一人の所作は延いて一社會の全面をも代表すると云ふ、極めて重大なる責任觀念が自ら啓發されて來るのである。斯くの如き、責任觀念は、單に、抽象的議論の結果ではなくして、吾々の日常生活に鑑みれば、毫末も疑ひなき明々白々なる事實である。假令、茲に、一の教育者があるとする、其の人は、非常に品行がわるいと云ふ事實を他の實業家とか或に宗教家が是れを論評する場合は、必らずや、教育者は墮落して居ると一概に批難するのである。何にも、其の教育者一人が全社會の教育者を代表すると云ふ譯ではないにしても、他の社會の人々は、教育社會全般を總稱して批難するのである。豈獨り教育者社會斯くの如き批評をうけるのではなく、實業家社會や、宗教家の社會に、若しも缺點があれば、教育者社會では之れを目して、實　社會は駄目だとか、なつて居ないなどゝ色々批評するのである。以上の事例は、無論狹義の社會現象として列擧したのであるが、廣い意味の社會としても、亦同樣である。假りに、日本人が外國人に接する場合に、若しも疎略なことがあれば、すべての日本人を引括つて惡評すると同樣に、外人に無法なことがあれば、直ぐに、一切の外人は宜しくないと評するやうになるのである。兎に角、斯くの如き論評は間違つて居るには相違ないが、併しながら其れは實際である。吾人は、是れを、綜合批評の思惟性と名づけて置くのである。偖て此の綜合批評の思惟性なるものは、理論的に見れば、間違つて居るけれども、此の思惟性あるがために、吾々の現在生存して居る社會組織は完全に秩序を保持し得るのである。何故かと云へば、此の綜合批評の思惟性は、責任觀念を擴大する處の前驅となつて現はれるからである。吾々の生の慾求として表出せゝるゝ事實の形式は、最初自他相互の關係交錯について一番能く目に映じ、それから引き續き自己の內省に及び、而して責任觀念を生じ、義務觀念が現はれて、茲に、自己制裁卽ち自制心が起るのである。斯の自制心が外に現はれて、社會公安の秩序を保持し、內にあつては、生の慾求を整理して如何なる形に於いて、表出すべきかの動機を形成し、更に、志向をも形造るのである。社會の

文化發展は、一切斯くの如き根本的動因から現はれるのであるから、若しも、狹義に於ける社會の一つ一つに就いて、考へれば、教育社會には、教育社會の文化があるし、又、實業社會には實業社會としての文化がなければならぬ。又、宗教家の社會には、宗教家としての文化發達が必らずあり得るのである。更に、一小部分の區域として考へても、學校は學校としての文化があるのは當然のことで、その文化を見出し得ないと云ふのは、間違つた考へ方であると謂はねばならぬ。然らば學校兒童に對して、社會的目的を遂行せしむると云ふことは、如何なる意味であるかを考究しなくてはならぬ。

生の慾求は天賦的のものであつて、しかも、それが、發展的のもので、社會一切の文化發展の基礎をなすものであると云ふならば、兒童が、日常、極めて、少數の時間内に於いて生活する學校と雖ども、亦學校としての文化は必らずあるべき筈であることは、前述せし如くであるが、偖て其の文化なるものは、兒童生活と如何に交渉して居るか、將亦、學校以外の他の社會文化と如何に關係

社會文化と學校教育の文化

して居るかの二種の問題を一瞥すれば、學校文化とは如何なるものであつて、又、其の文化と學童とは如何なる關係を持つて居るかと云ふことも大要理解し得るのである。

學校は、廣い意味の社會と云ふ見地から見れば、實に一小部分のものであるが、社會的有機體は、此の一小局部と雖ども、無關係にしては、組織體を構成することは出來ないから、他の社會に現はれたる事の一切、即ち、善かれ惡かれ悉く、何等かの形を以つて交渉して居るのである。換言すれば、社會一切の出來事は、學校生活の兒童には、必ず大なる影響を與へて居るのである。極めて分り易く云へば、學校以外の出來事は必ず學校へ流れ込んで來ると云ふことである。斯くの如く、清濁合せて流れ込んで來る社會文化の潮流に對しては、教育者は、果して如何なる態度を採るべきか、よしや、教育的に有害であると思つた處が、他の社會にある以上は、兒童は必ずやそれに感染して、學校内に持ち込むのである。教師が、教科書によつて、千萬言を費しても、兒童が持つて

居る社會的の影響の琴線に觸れない場合には、教師の訓へた其の事は、果して、どれだけの力を持つて、兒童の心に影響を與へるだらうか、若しも、兒童が無關心であれば、教師の力は絶對に價値を認められないし、又、少しでも耳朶に觸れるとすれば、兒童は、非常に疑惑を懷くのである。又、社會的影響が其れ程力强く教授力が徹底すれば、社會力の影響が否定されるか、さもなくば、教授力に反抗するか、二者其の一にあるのである。斯くの如く考へて見ると、學校教育の可能力は、單に知識技能の一面だけを授けるのであつて、文化的價値の特性は少しも認められないことになりはすまいか。極言すれば、社會の文化卽ち學校文化であつて、學校文化卽ち社會の文化であるかのやうに思はれる。我が邦現時の教育は、實に斯の點に彷徨して居ると思ふ。

斯くの如きは、學校としての教育的價値を認むることは出來ないのであるから、何うしても、學校は、學校としての特有なる文化を形成しなくてはならぬのである。

社會文化の本質は、各個人の生の慾求に根諦して現はれると同樣に、學校教育文化は、兒童の生的慾求に其の基礎を求め、一面に於いては、生的慾求を整齊すると共に、其の慾求を益々旺盛ならしむる處に教育的可能力が現はれて始めて學校教育特有の文化が生れ出づるのである。卽ち學校教育は、其の對象とする處の兒童が比較的未成熟者であるから、其の成人の生的慾求とは自ら異なることは蓋し當然の事實である。發達程度が旣に異なるからには成人の生的慾求を基礎とせる一般社會の文化と學校教育の文化とは、又、異なるべきこと自明の理である。

處が、兒童は、一面は、一般社會に接觸し、一面は學校教育に從つて居るから、其處に大なる懸け離れが生ずるのである。換言すれば、兒童は幼稚なる腦中に、不相應なる一般社會の事柄を刻み込んで、學校教育をうけて居るのである。此の二方面を巧みに結合せしめ兒童の生活を圓滿に發展せしむる處に教育上の陶冶の意味や價値が現はれて來る。斯の點は、實に、現時の教育の根本問

題であるが、併し、今の場合としては細論の必要もなく單に其の一部の結論だけを附加すれば充分であると思ふから殊に略述するが、先づ、兒童生活を本位として考へるならば、成人を單位とせる一般社會の文化は、兒童に對しては、不向きであると思ふけれども。何んとしても是れを防衛する手段方法はないのである。加之、兒童に對しては不相應だと云ふのは、それは、兒童にあらざる成人の云ふ言であつて、兒童自身は、相應であるとも、不相應であるとも云はぬのである。況して、隨時に、兒童自らの腦中に印刻する處から考へて見れば、不相應だと云ふのが間違つて居て、相應した分だけを採るのかもしれない。否、左樣に考へる方が寧ろ正當であると思ふ。生の慾求は、一面に於いては、理想を包含して居ると同時に、順應性をも持つて居る。理想は縱列的發展であつて、順應性は横列的擴大性である。此の見地からいれば生の慾求に應ずるため相當の部分だけ一般社會の文化發展の事實を取り入れ、そして、兒童自らも、無意識的の作用として順應活動を營爲して居ると見なければならぬ。而しながら、此の順應活動は生の慾求の一面であるから此の點からは、何んとしても、理想と云ふ、一面は現はれて來ないのである。若しも、順應の一面だけを考へて理想的方面を考へなければ、學校教育の陶冶は、仕事の半分だけしか行なはぬことになる。順應活動は、四圍の狀況を肯定したる理解となり、之れに伴ふ感情となり、更に其の四圍の狀態と同樣色彩にて表現せんとする意志は現はれるけれども、更に、一歩進んで、四圍の事情を伸展せしめようと云ふ理想に伴ふ感情も意志も現はれぬからである。詰り、其の儘捕捉して、其の儘投げ出すのが順應の順應たる所以であつて、少しでも、細工を凝らして投げ出す場合は純順應ではなく理想を加味されることになるのである、學校教育の文化的本質は、兒童の順應性を充分に生かして働かすと同樣に、理想を授け、其の理想を標準として、兒童自身の腦中に於いて、工夫を凝らし、順應すべくして順應し、順應すべからずしては、順應せじと、開拓すると云ふ力其のものを中心として形成しなくてはならぬ。此の力其のものは、是れ卽ち、獨創力であつて、一度、

斯の力によつて、思考されたならばよしや、周圍順應の形は、依然として舊套を追ふにしても、其順應活動の內面に於いては、無形的なる獨創力が流れて居ることをも認めなければならぬ。獨創とか、創造とか云ふことを、彩の上にも、精神の上にも、兩々相俟つて、新規のものでなくてはならぬと云ふやうに考へるのは、餘りに偏屈であつて、學校文化の本質としては、採るべき點ではないと思ふ。

學校教育と文化と陶冶

要するに、學校教育の文化は、兒童の生的慾求の整齊に根締するものであつて、教育上重大なる意味を有する陶冶は、此の文化的本質を洗練する處にあるのである。此の意味に於ける陶冶を完成すると云ふことは、順應活動と理想と緊密に結合せしめ、內在的潛勢力を涵養すると謂ふことになるのであるから、兒童自身は、必要に應じては、精神的修養もしようし、體育的修練もしようし、知的修養もしようし、情的修養もしようし、意志的活動もしようし、兎に角、臨機應變に、自己決定に基づく自己活動を遺憾なく實現し得るのである。

第九節　自然的目的

人が自然に對して危惧するは不幸此の上もない。けれども、危惧することを知らず唯々無限の樂園であるとのみ歡喜する人も亦不幸の人である。兩者は、其の反面を觀て他の一面を知らぬからである。人は、自然の中に生れ又自然の中に死ぬのである。生れ出づる前緣にも大自然は橫はり、死後幾百萬里にも大自然の行程は聯絡して居るのである。現在も自然、過去も未來も大自然の一掌中にあるのである。

人爲萬能を絕叫するも、それは、春の夜の夢であつて、果敢ないものである。大自然の威力は、無限の力あり無限の情趣がある。人爲には限りあり盡くる處あり盡くる時がある、梁川氏が悲觀の高潮を叫んだのは、大自然と人爲とのコンバルジョンを道破した處に熱狂した憧憬の感の湧出したのである。吾人人生は一人一己に對して、是非の論評を下すのは、大自然を味ふための出發點であつて、其の一ポイントに不動の姿勢を固持すべきものではない。人若し、

此の一點にのみ足を止めて進むを知らぬならば、人爲と自然との關係は、悲觀すべきもので、永久に、樂園の客となる事は出來ぬのである。一人一己の相手を通り拔けて進む處には、家族と云ふ團欒の樂園がある。逍遙數歩眼界を少しく擴大すれば、其處には、國家と云ふ宿場がある。各々の家族を代表した各個人は、各々、手に手に、乘車の切符を持ち、各階級相當に乘り込み、吾先きにと急ぎ行くのである。驛所々々を通り拔けては、更に更に、廣大なる樂園がある。此處には、人類社會と云ふ大業な標札を掲げ、上は王侯貴人より、下は一見人にあらずして、何にものであるかと迄疑はるゝ風態のもの迄入り込み、其の人々は、どれも、これも、各自現屬する一團體、一國家を代表し、時には、手を握り、言葉を換はして共に親しく樂しむのである。此の大旅行も最早行く先き僅かとなり、結局、宇宙と名づくる、大々的の大業な團體に到着するのである。其處には、人非人の差別を撤廢し、苟も、ありとあらゆる諸物一切、卽ち、森羅萬象は、皆、我が、よき友となり、よき師となり、よき兄弟姉妹となりて交際するのである。大自然の妙味は是に於いて濃厚の度が極點に到達するのである。語らんと欲すれば、山川草木、花鳥風月、己れの言はんと欲する處に先きんじて語る。我を知るものは何んぞ斯の大自然に若かん、とは、人生悉く自らなる歡喜愉悅の聲である。

春來れば、春風駘蕩として精趣の濃なることを敎ふ。櫻花は爛漫として、七重八重に包み重ねたる人生の祕事を悉く披瀝して居る。月夜溯上に扁舟を泛べ、水煙模糊の中、燈火の明滅相對して寂寞の間にも又稍々悠遠なる平和の感は自ら味得される。吾々、苦しき人生の安慰は是に於いて一掃せられ、大自然は大慈悲であると絕叫せざるを得ないのである。

大自然の眼中には、貴賤貧富の差別なく、老幼男女の隔てとてもなく、其の取るが儘に任せ、其の望む處に與ふるのである。大自然の大慈悲實に廣大なりと謂はざるを得んやである。されども、時には、天邊地妖人心を恐怖の極點に迄震慄せしむる偉大なる敎訓をも與へてくれるのである。偖ても恐るべきもの

自然觀

は、此の宇宙大自然である。實に、恐るべきものゝ極致ではあるまいか。

樂しむべきを樂しみ、恐るべきを恐れ、孜々精勵人事を盡す處に世の文化は表現せらるゝのである。

自然に對する人間の位置

斯くの如き、大自然に對して、宗教家は、崇高の念凝結して、全知全能なる神と尊崇し、詩人は、又、詩人らしく、詩的實在性の人格を承認して居る。哲學者の自然考察は、中々に一致しない。理知の鋭い鉾先きにて、切り開きては、更に繼ぎ合せ、恰度、下手な彫刻家のやうに鑿跡を殘しては大自然の偉大を嘆賞して居るが、何れの觀方からしても、兎に角、偉大なる動因の實存して居ることを否む譯には行かぬので、宇宙間の森羅萬象は、件の一大動因から表徵せられたものであることは萬人悉く認むるのである。

偖てお互人類は、萬物の靈長であると云ふて朝に夕に吹く風の儘に威張つて居るが、威張るならば、威張るだけの估券を持たなくてはならぬ。春は花咲き、夏來りて草木茂り、秋に入りて、實を結び、冬を迎へては萬物藏まる。草木にしても、四時少しも違へずに、自分のなすべき任務を果して居る。焉んぞ知らん、人間は靈長なりと自稱する覺悟あるならば、此の偉大なる天道を盡さずには居られまい。

近く、形から見れば、草である。樹である、鳥である。獸である。蟲である。魚である。すべて禽獸蟲魚は、人間の仲間には入れぬのであるが、猶、心眼を開けば、此の無限の差別界にも亦一味平等の眞如實相界を見出し、眞卽俗の一致觀を見出されるであらうと思ふ。少しの依怙贔負もなく、眞卽俗の一味平等觀から、四周を見るときは、人類は悉く兄弟姉妹である許りではなく森羅萬象と雖ども、唯、吾々、人類と其の因緣が遠近疏密の差等あるのみで、自らなる兄弟姉妹であることを考へられる。

人は人に哺育せられ、救護せられ、教養せられたことは千萬承知で、恰度天の默止のやうに約束されて居るが、人以外のものは人の仇敵であるかのやうに考へ、見さへすれば、打つたり、蹴つたり、非道なことを敢へてしても、平氣で

居るのは、世の人の常態である。人以外の諸物は、人に對して、それ程迄仇をなすものであらうか、人によりては、左樣に思ふかも知れぬが、少しく公平に見たならば、人が人を助けるよりも、人以外の諸物が人を助け勵ます力の方がどれ程偉大であるか底知れぬ程の偉大さが知られる。吾々人間は、裸體では一時半時の生を保つことも出來ぬ。又、食はずに高楊枝も、訓言としては一興だが一飯の食さへも缺くとは出來ぬ。夜に入れば、野天に五體を露すことも忍び難い。何んと云ふても、衣食住の用度を調達しなければならぬ。斯の用度の素材は、必ずしも、人以外の諸物が、人のために犧牲になつて、人の心や體の中に潛在して居るのがある。併し、此の潛在は復活である。彼れ等は隱然德をなし、人に偉大なる力を與へて居る。人は、可なり器用な動物ではあるが、一本の樹と雖ども、新規に拵へることは出來ない。一匹の蟲と雖ども、生命を造ることは不可能である。唯、器用に出來て居るだけ、諸物を素材として、其の素材に加工して人々相互に役立てる一種の加工品職工である。加工品職工が獨舞臺として權威を張り、素材となる諸物が奴隷視される理由は何處にあるか、公平とは、人々相互の間にのみ使ふべき特許權を持つて居るのではない。諸物一切に對して、大自然の天帝の使用する神の言葉であるから、人も諸物も大自然の慈眼から見て、生命の流れを貫く眞相を謂へば、一切萬物は實に平等一如のものである。

諸生一切生命の共通あればこそ、大自然は吾々人類に對して、夜となく晝となく無言の教訓を與へ、又、美妙の感をデウユルヒして眞の安知を與ふるアルトアンメーである。

アリストートルが神の崇高なる所以を尊稱して、人が寢て居る時にも神は能く働くのを見れば、神は人よりも優れて居ることが分ると云はれた。大自然をば神の顯現と考へるならば、此の語亦適用せらるゝのである。人には、寢ぬる時あり、休む時あり、されど、大自然は間斷なく何事をか吾々人類に示唆しつゝあるのだ。諸物悉く形は異なれども無言の兄弟姉妹である。プラトーンは謂へ

り、お互人間は大宇宙を縮寫せる小宇宙であると實に至言と謂ふべきである。大自然は、吾々人間の外に在つて、命令し訓戒し示唆し强要するものであると思ふのは、原始素朴の考へであつて、外にあるのではなく却つて、吾々人類の中に宿在して居る。自然には自然の理法があり、人爲には人爲の理法がある。吾々人間は、一面から見れば、實に自然の赤子であつて、大自然の一個體であるやうに思はれるが、他の一面から見れば、人爲當然の理法のみで仕揚げられて居るやうにも見える。實に、吾々の個體中には、自然と人爲と兩者が包容して居るが、それは對立的關係ではなく、統一的關係である。其れ故に、自然の大理を無視したくともそれは度外することは出來ない。又、さうかと云ふても、自然の理法だけでは人として生きては行かれないから、其處に調和統一がなければならいのである。

宇宙間の森羅萬象は皆此の自然法の定律によつて生成したので、人類とても、此の定律の作用によつて、產み出されたのである。人類の出現は、自然と人爲との比律が、他の諸物よりも自然的の要素が洗練されたのである。諸物は自然其のものを自觀することは出來ないが、人間は、自然其の者を自觀し、自然の作用をも亦自認し得る迄に發達を遂げたのである。自然其のものゝ自觀や、作用を自認すると云ふことは、人間個體中に包容せられて居る大自然を自力によつても亦洗練し得るのである。諸物は、自觀自認の力がないから、個體の內から個體の自力によつて、個體中の自然を洗練する力は缺けて居る。唯、外から、影響をうけて洗練される許りである。人間と他の諸物との相違の根本的なる一點は此の處にあるのである。人間の進步發達は、色々樣々の意味に解釋されて居るけれども、己れ自らの個體中に內在して居る自然を自觀し自認する其の力の發達を意味するのである。この力は、實に、自然を洗練し、人爲法を建設し、改造する自律自活の力となつて現はれるからである。此の力は吾々の認識の對象物を自己の內在に認むる處迄發達して自然其のものを充分に洗練するのである。古代希臘の大哲、プラトーンは、箇中の關係を詩的に面白く解

說して居る。以爲らく、吾々人間は悉く向上發展の氣性を持つて居るが、其の氣性は吾々自體の中に宿在してある小觀念が、其の本家本元である大觀念に一致しやうと云ふ處から來るので其の力をばエロースと云ふて居る。實に分り易く面白く說いてある。要するに自然に對する人間の位置と云ふものは、中々分り難いものであるが、併し、眞實僞りのない生其のものゝ慾求から考へて見ると誠によく理解される。生の本質は、生活本能として現はるゝ自然的のものであつて、よしや、遺傳的要素が加味されたにしても、それは等しく自然的であることには少しも差し障りはないのである。生の本質を本能の形に於いて滿足することは、社會的形式には不相應となつて居るから、其處で、吾々の生活本能は、生活の樣式と云ふことを工夫しなければならぬ。其の工夫力は、人爲の力を待つて始めて仕遂げられるのである。處が、最初の場合は、生活本能の自然的作用と、生活樣式との不一致な點からして尠からず葛藤が生ずる。此の葛藤は、詰り、自然に對する人間の位置の爭ひであつて、生活樣式の型があまりに勢力を得過ぎて、生活本能の自然的方面を壓迫してしまへば、頗る窮屈なる形骸となつてしまふし、又、本能の自然的方面を强くし過ぎるときには、生活樣式を攪亂して社會の風紀を亂し、延ひては秩序を保持するに困難が生じて來る。此の程よい統一を計る處に敎育的陶冶の本領を見出すと共に、學校體操に於ける陶冶の意義を見出し得るのである。

偖て自然と人爲との程よい統一を計るには、如何なる態度を以つて學童を取り扱つたならば宜しいかと云ふことが問題である。其の順序として、我が邦現時に於ける自然觀は、如何なるものであるかを一瞥して多少の警告を與へたいと思ふ。

十九世紀の後半から現在に迄引き續き自然と人爲との對抗に關する一般的思潮は、我が邦と云はず、歐米の何れの國でも、悉く活動主義の一手販賣であつた。其の實際的方面を極力唱導した代表的思潮は謂ふ迄もなくプラクマテヂムである。斯の主義は、實利實用を主としたのであるから、一方には、自然力を

物質化して考へやうと謂ふ傾向があつたから、穩當なる主張と謂ふよりか、寧ろ人間の生活樣式に重きを置き、而して其の樣式は、主として裝飾的になる缺陷があつたのである。勿論、最近に於いて、獨逸のオイケンや佛國のベルグソン、其の他、獨逸西南派のやうな思潮も現はれるには現はれたが、世界人心の嗜好に投じたのは、何んと云ふても、實利實用を尊重すると云ふ考へである。

斯くの如き活動的思潮に支配され、物質化の力が强烈になつた現時の人心は、餘程、根氣が倦怠して、他の方面の何ものかを要求して來た處に現はれたのが、オイケンの哲學であり、ベルグソンの哲學であつた。現代は、從來の活動主義をば幾分か着色して自然と人爲との緩和を調訂したいと云ふ場面に立ち至つたのである。處が、斯の調和統一は、歐洲戰亂のために、世界の人心は悉く攪亂されると同時に、思想上の調和點迄も消失されてしまつたのである。其の結果、獨逸國は、政體の變化を來たし、世界諸列國は、米國一流のデモクラツクの主張となつた。斯の思想は、單に政治上の一主義であるからと云ふて對岸の火視すべきものではなく、充分に考究しなくてはならぬ。

時代思潮の出現は、何時、如何なる時代であつても、公平無私なる中庸を得た處のものは殆んどないのである。必らずしも、或る反面の極端を主張するか、左もなくば、極端になり易い傾向を胚胎して居るものである。吾々が日常生活に徵しても亦此の道理は自明である。渴しては極度に水を欲し、寒さに逢ふては暖氣を極度に要求する。各個人が、國家的統治機關の壓迫をうけて、自由を要求する場合は、それがよしや極端なる自由を唱導しないにしても、自由放漫になり易い傾向を充分胚胎して居る。各個人的の自由も、國家的統治機關の運用も、是れ決して無關係なものではなく、要するに、各個人の生活樣式に對する關係の問題である。個人の自由を要求するのは、個人性の中に包容されて居る自然性を滿足せしむるやうに慾求するのであるし、國家的統治機關の唱導は、人爲的樣式を個人に强ふるのである。其れ故に、個人と國家との關係問題は非常に錯雜して、容易に解決がつかなくなつて、結局、革命と云ふ慘禍を招

致するやうになるのである。

元來、デモクラシーの思想には、種々複雜した要素が、織り込まれて居るけれども、其の奥の奥迄入り込んで考へて見ると個體的存在の中に包容されて居る自然性と人爲との關係問題に歸するのであるから、斯の點を充分考究すれば、教育上如何に斯の問題を解決すべきものであるか、將亦、如何に兒童に授くべきものであるかは自ら明かになるのである。

偖て次に起る問題は、個人の要求する生活樣式と國家が個人に强ふる生活樣式とは、何故に、不調和となるかと云ふことである。國家的存在は、各個人を無視しては存在し得ないものであるが、併し、國家と云ふ個體的存在物はなく抽象名辭に過ぎない。國家は有機的に結合されて居るとは云ふものゝそれは、個人と個人との關係、個人と主權との關係を總稱した見方で、一の個體的存在物が實存して居ると云ふ意味ではない。比喩を以つて云へば、生物と云ふ實存體は何處を探してもないけれど、生物と云ふ概念は存在し得ると同樣である。

其れ故に、國家爲政の運用と云ふものは、個人の自然性に對しては動くともすれば度外する傾向を持つて居る。爲政家が、民意に通ずるとか下情に通ずるとか云ふことが、爲政上大切になつて居るのは、取りも直さず、個人の自然要求を承知することが大切であると云ふことに換言し得るのである。

この邊の消息を充分に理解して居れば、何時、如何なる時代思潮が出現しても、決して、迷はされるやうなことは、更になく、何時でも、自國々民の態度を維持し、國民生活を基礎として、批判することも出來るし、又、自國々民生活の短所を反省して、採擇すべきは充分に採擇し得ることになる。教育者たるものは、斯くの如き、大元締めを確實に捕へて、學童に接することは、實に重大なる點である。

處が、妙なことには、國家對個人の關係は、教師對學童の關係に轉換されて居ることである。又、家庭に於いては、家長對家族との關係、又、雇主と雇人との關係、資本主と勞働者との關係等にも轉換されて居る。世界に於ける、あ

師道の本領

らゆる爭鬪は、實際上種々なる形を以つて、現はれて居るけれども、此の根本義に立ち到れば、一切是れ、自然と人爲との規律如何の問題に歸結されるのである。

今の場合、廣い社會問題を論究する必要はないが、敎師對學童の關係の一項だけを明かにして自然的目的の一段を落着しようと思ふ。

敎師對學童の關係を論究して、師道の本領那邊にあるかを探究するにしても、主として、學校體操科として述ぶるのであるから、其の範圍は極めて狹いのである。併しながら、學童に對する敎師の態度は、國家が個人に對するよりも、層一層、不合理であつて、且つ、壓迫的になり易いのである。何故かと云ふに、國家統治の運用に關する爲政は、成人者なる國民を對象として營爲するが、敎師對學童は未成熟者なる兒童を相手として、成熟したる成人が授けて行くのだから、其處に、不合理な點が生じ易いのである。勿論、敎育學と云ふものもあつて、大體の標準や法則を指定してくれるし、又、兒童心理學と云ふやうな調法なものもあつて、學童の心的傾向を敎へてくれるが、子供の心は、子供にだけ其の眞相が分るので、成人には、唯、推測した處のものだけが分つて居る。況して、我が邦の如き、普通師範程度の敎育力では到底兒童の心意の要求等は理解し得ないことゝ思ふ。この點から云へば、兒童の心意狀態は、確かに、敎師萬能論を排擊して、兒童本位のデモクラテックの傾向を盛んに主張して居るに相違ないと思ふ。處が、敎師の方では近頃の子供は、どうも生意氣で困ると云ふて自分を反省することをば少しもしない。けれども、政治上、官僚政治はどうの、元老はどうの、延ひては、デモクラシーはどうのと中々卓越な議論らしい言辭を弄して居るが肝腎の本人は、官僚式であり、元老式の敎育法をやつて居る。この點を少しく反省すれば、第一に自然的に欲求する兒童の生活樣式はなんであるか、と云ふことが自ら判然する。從來とても、個性の研究とか、兒童觀察とか云ふことが行はれて居つたが、個性だとか、觀察だとか、斯う云ふ抽象的學者的のものでなく、今少し、實際的に、兒童が兒童らしい生活

を要求するに相違ないから、其の要求はどんなものであるかを知らなくてはならぬ。其の欲求を確めて、然る後に、始めて、眞の教育が出來るのである。

殊に、學校體操の如きは、直接兒童の身體運動によつて教育するのであるから、先づ第一に、兒童が、兒童自らを生かして行く運動を施して、殆んど何等の制限や拘束を加へずに生氣潑溂たる運動を行はしめる。斯くして、各〻の兒童が一團となつてやる場合には、其處に自ら、兒童同志の制裁も出來るし、契約も出來る。若し、斯う云ふ秩序の出來ない場合は、其處に、教師の方から、人爲的指導を與へ、其の指導を加へた結果、一團の運動は、規則正しく、且つ、各〻の兒童も樂しくやることが出來るやうにして、其の規律を犯したものは、自ら恥づると云ふやうにすれば、よしや、教師が、指導を加へた、人爲の法則も、忽ちにして、兒童自らの自然的要求と同化してしまうことになると同時に、其處に、本當の根柢ある規律も出來るし、德性の基礎も建設されることになる。

從來の躾方から云へば、自然的目的を達せしめるためには、先づ、樹木を折つてはならぬとか、動物を愛護せよとか、自然の風景を味ふて、趣味を涵養するとか云ふて、兎角、自然をば、外界事物にのみ擬して居つた。勿論斯くの如き事柄も必要であるには相違ないが、兒童は、外界にある自然よりも、內在してある自然を好愛し、寧ろ自然其の儘であるから、外界事物に對して、同感すれば、直ぐに、それを自分の意志の儘に自由にしたいと本能的作用が現はれて、或は學校園の樹木の枝を折つたり花を摘んだり、或は、猫や犬を虐めたりするが、成人から見れば、實に苛酷な行ひであるけれども、兒童の心に照して見ると其れが愛する形なので、全然無關心であれば、折りもしないし、摘みもしない、又、虐めもしないのである。彼の未開人の中にある愛の一例として、北海道のアイヌ人の熊祭り等は、熊を愛するために、子供の時から飼つて、それを殺して紀念に祭りをすると云ふことは、實に矛盾此の上もないのであるが彼れ等同族の中では、其れが愛の表徵となつて居る。斯くの如き狀態を漸次指

研究的態度の問題

導する處に教育の意味があるので、若しも宜しくないことがあるからと云ふて、成人の考へで、高壓的に壓倒してしまうのは、教育的官僚式であつて、兒童が、折角、内在的自然を發揮して人爲的法則と、漸次に自發的に調和せしめようと云ふ無言の約束を全然沒却せしむることになるのであるから、教育者は、充分注意を拂はなくてはならぬことゝ思ふ。

第十節　學校體操方法論の概括

前數項に亙りて、文部省より發表したる彼の體操科要目なるものは不完全なるものであるとを述べて置いたが、現今我が邦の學校體操を施行する場合の實際を見れば、一も二もなく彼の要目を其の儘施行して何等の反省も研究もしないのである。勿論、其の儘施行して支障のない教材もあらうけれども、苟も教育的に取り扱ふ場合には、其の教材の由つて來る理由根據を確めなくてはならぬのである。其の理由や根據を確めないで、無自覺でやつて居るために、實際教育者の側では、自信を以つて、體操を施すことが出來ないのである。其れ故に、少し考へる實際家は、現時の體操位、譯のわからないものはない。何をやつてよいか少しも譯が分からないと口說を云ふて居るが、偖て研究してやらうと云ふ場合になると、先づ、是れ迄公刊されてある體操書を繙いて、甲の教材を乙に配合して見たり、乙の教材を丙に配合して見たり頻りに引越し的の配合をやつて居る。其處で、彌〻、引越しも、何うやら出來上ると研究終了したと云ふ顏で安然たるものである。吾人はこの種の研究を綜稱して轉換式研究と云ひたい。斯くの如き引越し轉換をどれだけやつた處が、合理的方法の原則を見出し得るものでもなければ、將又、實際的價値を擧げ得るものでもない。唯、暇つぶしであつて、骨折り損の草臥儲けである。けれども、學校體操の研究と云へば、是れより外に仕方のないものゝやうに考へて居る我が邦現時の實際教育社界は、實に慨嘆すべき一事である。又、或る人の如きは、今の處は、學校體操は永井式でなければならぬけれども、それも、何時迄續くか、其の内に又誰れかがやり出せば屹度變るに相違ないから、世間體をよくするだけに止めて、

あまり深入りしない方が利口なやり方だと云ふて居る。成る程、斯う云ふ蓋然的の考へから一種の流行同樣に見られるのも無理はないのである。現に、今日は最早、永井式學校體操も餘程下火になつて來た、と、云ふのは、瑞典式樣の體操も特色は充分あるが、併しそれだけでは未だ充分だとは云ひ得ない。それを補ふ處のものを加へなければならぬと云ふやうな聲が、彼の高等師範學校内からも、可なり囂しく呼び出されて來た。其の補充すべき運動は何かと云ふに、所謂、競技運動である。この競技運動を加へなければならぬと云ふことになると實際教育者の考へは忽ちにして、それ來たぞ、今度は競技でなければならぬと云ふてやきもき騷ぎ立てると云ふように、殆んど停止する處を知らない有樣である。斯くの如き、輕俳浮薄の態度は、他に見ることの出來ないものである。斯ふ云ふ態度は畢竟するに、研究の態度に於いて根本的革進を促す必要を認むるのである。

見解を擴大せよ——教育的の仕事として確實なる自信を持つてやるやうにするためには、從來やり來たつたやうな轉換式の研究や引越し的の研究では駄目である、又、體操の研究會等で見るやうな研究の仕方では到底役に立つやうな研究結果を得られないのである。個人的研究の方面に於いても將又公衆の集會研究でも、實に言語同斷で、眞面目なる研究とは思はれないのは現時の狀況である。假りに、公衆集會の體操研究會の一例を云ふと、研究會當日には先づ一定の學年の運動を行ふ。處が、其の運動や遊戯は、前以つて、充分に練習し、忌憚なく云へば、研究會當日集會者に展覽する目的で精を限りに練習するのが一般の常態である。其處で、彌々、其の實地演習技が終了すれば、批評會を開いて、其れが研究と云ふことに相當するのである。批評者は、如何なる批評をするかと云ふと、第一に步調が速いとか或は緩いとか、步ゆみが狹いとか廣いとか、或は、姿勢がどうの、手の擧げ工合がどうも緩いとか、教授者が熱心の割合に兒童が氣のりしないとか云ふやうな、思ひつき〳〵を勝手に申述べて、教授者始め責任ある學校長は、唯々として拜聽すると云ふ仕末である。尤も、斯

う云ふ研究法をやらねばならぬ時代も昔はあつたに相違ないけれども、今日となりては、斯う云ふ研究法では何等の意味を爲さぬ。何んとなれば、參觀者が各自勝手に自分の思ひつきだけを、言ふたからとて、それは其の人の思ひつきだけであつて學校體操の原理を闡明するだけに、何れだけ效果があるか、强ひて云へば、權兵衞や田吾作が彼れ是れ批評する下馬評と何んぞ異ならんやである。又、教授者側にても、平常精限り根限り練習して、上々の出來榮えを展覽して其れに對する何等の注意も附帶しなければ恰度謎のやうな姿で、抛り出すのである　尤も、斯う云ふ出來上つたものを見せると云ふことは、其の學年の能力としては、是れ迄は發達し得るものであると云ふ最上限度を見せる意味であるならば一應承知も出來るが、然らば、其の最上限度だけを見てそれで、體操研究の目的を達するのであるかと云ふに、それは研究の一方面から見れば、發達し得る可能性を實證した參考資料だけであつて、其の他には何等の意味をなさぬのである。現時の研究會は、是れ丈けで以つて全目的を達したかのやうに考へるのは見解の狹隘なることも亦驚くの外はないのである。

假りに吾々が、最も精巧なる美術品を見る時に、其の技の巧なることに驚くと同時に、刀の使方とか、或は、其の作者の苦心とか修練とか、斯う云ふ內面的經過、卽ち、精巧なる作品を仕揚げる迄の經過を聞きたいし、また自分が作者であれば、敎へたいと思ふのは、人間の特性であつて、誰れでも、この考へが起るのだが、學校體操研究の場合には、敎授者の方でも隱蔽して置けば、參列した諸員も訊うともしないので實に珍妙の變態現象が表はれて居るのである。何んと云ふても、斯う云ふ變態の研究會を打破して、敎授者は、出來上つた其の結果を展覽するにしても、其の結果に到達する迄の經過を出來るだけ細密に觀察し、其の記錄を作成し、技術的發達の一面と、精神的特徵と、又、身體各部の影響に就いて眞實僞らないレコードを基礎として研究しなくてはならぬのである。斯くの如き方面から研究の步を進めて行けば、學校體操の法則となるべきものを發見し得ると同時に、反面に、運動心理の現象も考へられ、心

身の能率を向上せしむる方面迄も進めることが出來る。此の點迄進めば、當然の結果として、一般に於ける教育衛生、教授衛生の問題にも接觸して來るから、其の貢獻する處は、主として學校體操の原理となるべき方面ではあるにしても、其の副次的の貢獻として種々なる方面に迄も研究のヒントを與へることになるのである。況して、道德的精神の涵養即ち德性涵養の問題等はこの方面から解決せらるべき好箇の出發點であると思ふ。

何れより着手すべきか――前二項に於いて大要述べたやうに、研究の態度を決定し、見解を擴大したとすれば、何れの方面から着手すれば、宜しいかと云ふ問題になる。是れには、大體二方面から觀て考へることが出來る。即ち、學校體操を純粹の理屈として研究する場合と、他の一は、實際を基礎として研究する場合とである。前者は、暫く置き、後者の見地から云ふならば、先づ、學校體操として行ふべき運動其のもの……質……について研究するがよいと思ふ。この傾向の研究になると、暫く、體操要目とか或は、法令とか、さう云ふ既定の型を離れて、公平無私に、考へなければならぬ。この問題についての具例は、後節、實際的基礎に於いて述べようと思ふ。

運動其のものゝ質的の研究は、最初、人體解剖の原理に基づく諸關節を中心として考へて見るがよい。さうすると、運動の質と云ふものは、さう澤山、無制限にあるものではない。大體數に於いて極度がある。諸關節を中心として質を考へて見ると、其處に、當然の結果として、人間以外の他の動物について、比較研究して見たいと云ふ欲望、即ち、知的要求が起る。其處で、比較動物學的の研究に移り、人間の運動に於ける質と他の動物に於ける質とは、異なる所以の原理が判然する。更に、今一歩進んで來れば、他の動物と人間の運動が、其の質に於いて異なる點もあるし、又同樣なる點もあるとすれば、それは、又どう云ふ譯で、異同が生じたかと云ふことの疑問が生ずるのである。この問題に答へるのは、生物進化の役目であつて、其の根柢に到達すれば、即ち、遺傳の問題となり、境遇の影響となり、又、二者の關係等の解說によつて明かにな

る。更に、一方は、境遇的影響の問題から歩を進めて行けば、茲に、當然招致する問題は、自然界からうける影響である。卽ち、寒い地方の人間と暖い地方の人間との相違、或は海岸の人間と山間の人間、或は、雨量の多い地方と少い地方、或は、地層の關係、猶ほ廣く世界的に見れば、南極と北極、寒帶と熱帶、中間帶と云ふ比較研究にもある。又、東半球の人間と西半球の人間の比較研究もある。島國の人間と大陸の人間と云ふ研究も面白い、斯くの如く見解を擴大し、それから其れへと進んで行けば、單簡なる運動の質と云ふ問題だけでも、地理學も關係すれば、人類學も關係して來るし、氣象學も學ばねばならぬし、地質學土壤學も關係しなければならぬ、生物學も進化論も、殆んどありとあらゆる自然研究の科學から補助をうけなければならぬことになるのであるから一朝一夕に解決のつく問題ではない。況して、以上は、單に運動其のものゝ、質だけを見たのであるが、それに、運動の量の方面を加へなければならぬ。是れは、又、非常に困難な仕事であつて、關係科學は、質的研究と同樣なるのみならず、運動生理上の細密なる研究を要するのである。例令、手一本を一寸前方に擧げたとしても、所要關節の運動領域から、所要筋の運動、神經作用、及び血液運行其の他內部組織の移行と云ふやうに、それからそれと研究要項があるのである。況して、それに、人間の精神的方面を加味して考へる場合になると最早、手のつけ處がない程問題が複雜して來るのである。其れ故に、斯う云ふ方面の研究には、一歩々々、廣さにも、亦、深みにも這入るやうにして行かないと結局、何が何んだか譯が分らなくなつてしまうから、一定の研究要項を決定して、研究の方針を確立して取りかゝらなければならぬ。

次は、人事界の影響、卽ち、社會的の影響について、研究すべき大要目を擧げて見よう。第一に、運動の質及び量に最も關係する社會的影響は、其の社會の風俗習慣である。この中には、精神的方面も包含されて居るが、先づ、形而下的の事柄を云へば、衣服、住居、食物、等が大なる關係を持つて居る。又、人事社會の制度の上から云へば、第一に結婚制度の如きは、運動其のものゝ、

質量的關係ばかりでなく、知識的方面に於いても、亦、體質的方面に於いても最も重大なる關係を有するもので體質改良の實驗を實現するには、何としても結婚制度を何等かの形に於いて最密に規定する必要がある。この見地からして、彼の優生學と云ふやうな學問が產出したのである。

以上は自然的影響と人事社會の影響に基づいて研究すべき極めて大體の標的を示唆したに過ぎないが、實際的研究としての最も手近な研究で、又、是非、其の手近な研究から出發しなければならぬ問題は、言ふ迄もなく、未成熟なる學童の身體的發達並に精心的發達を基礎としたる教育的意味の方面に於ける研究から出發しなければならぬと思ふのである。次節は、極めて大體に於ける研究ではあるが、兒童の生理的發達並に精神的發達を明かにして、學校體操は、斯う云ふ發達階段に相應しなくてはならぬと云ふことの大要を述べ、更に、實際的基礎として、實際教育者が、日常體操を行ふ場合にも研究的態度を忘れてはならぬと云ふことの大要を略述したいと思ふのである。

自我に對する見解

第十一節　精神的發達より觀たる基礎

學校體操は、其の目的の見地から見て、人格的意味を持たなくてはならぬと云ふことは、前條述べた通りであるが、偖てこの人格的意味を中心として學校體操の方法を構成する基礎概念は、各兒童の自我觀念の成長發達と云ふことを中核にしなくてはならぬ。勿論、自我觀念の發達を細論するには明細なる心理的分解に基づいて述べなければならぬが、今の場合、斯くの如き細密なる兒童心理學的分解法の一々に就いて說明することをば避けて、先づ其の中核と認むる自我觀念の成長發達の大要を論述しようと思ふ。併し、其の前提として、吾人の所謂自我なるものは如何なものであるかと云ふことを述べなければならぬ。

自我に對する見解――この問題に就いて歷史的に考究すれば、中々其の採決は容易でない。古往今來諸學者の間に研究討議せられ種々雜々の說がある。今一々是れ等の說を指摘して論評することは不可能であるから、吾人の信ずる自我觀念の結論だけを云へば……自我とは生の自覺に伴ふ生活其のものが自我で

ある。……自我の見解を此處迄擴大すれば、精神的方面も身體的方面も一切合切含蓄されるが、更に狹義に考ふれば、……生に對する自覺の發達に隨つて其の意味が漸次狹隘となるのである。何となれば、生は事實であつて寸毫も疑ふべき餘地はないが、其の事實に對して自覺を進めて行く場合になると、其處には、自然の約束として自ら順序階段がある。又、横の方にも範圍の廣狹がある。約言すれば、生の事實に對して、竪の方へも横の方へも自然的順序がある。其順序から云へば、狹義の自我として幾通りにも區別することが出來る。併し、この區別は、要するに、自覺する自我と、自覺される自我との對立である。其れ故に、自覺する自我は吾々の個體として存在して居る中にあるのだから認識關係から云へば、之れを現象と云ふてもよい。現象は吾々の個體外にもあるが又中にもある。併し、一歩々々現象の領域を實在化して行く處に、自覺の範圍が擴大されると共に自我の領域も擴がると云ふことである。故に、實在と云ふことは自覺に據つて系統立てられた活動の中心と云ふことで、現象と云ふ意味と

對立せしめて考ふれば現象の方は自然的系統はあるけれども、人間の理想によつて價値評價されて居ない系統である。偖て理想と云ふのは、生の發展的自覺を意味するもので、價値は、この發展的組織中に按排される其の一つ〳〵を指して云ふことになる。故に、理想も價値も等しく生の見地から云へば發展的意味を持つて居るので、發展の形式から云へば理想であつて其の實質から云へば價値である。吾々の生活樣式も實質も皆この二大關鍵によつて改造し進歩するのである。然らば、理想と價値と自覺、この三者の關係は何うなるかと云へば、自覺は理想と價値とを結合せしむる處に其の本領が存在して居る。けれども、其の結合は、理想を指導し、價値の有無を判斷し遂行實現するだけの力量を有するものでなければ充分に其の役目を果たすことは出來ないのだから、……自覺……と云へば、無論理想的方面も價値的方面も含まれて居るのだが、其の役目を假りに言葉の上で區別すれば、以上の如き關係であると云ふだけのことで、若しも、人間の思想や感情を言語で發表し、或は筆で現はす場合に、時間

的制約を超越することが出來て、一所に、同時的に、現はすことが可能であれば、斯くの如き區別も分類も必要はないが、何としても思想や感情を發表する場合には、一つ〳〵縱に並べて出すより外仕方はない。そして其の一つと一つの間にも時間隔りがある。其の微細なる時間的隔りには、空間に瀰慢して居る亡者が入り込んで思想や感情を混惑させるから、自分の思想を人に傳へる時には實に恐しいやうな氣分になる。この點から云ふと、彼の禪道の如きは、實に安泰なもので、拈華して微笑された處は千萬無量の想界を披瀝した實に貴い處である。又、美術の貴い處も其の通り、管々敷説明も解説も要しない。繪其のものを出せば作者の想界は既に展開されて居る。この意味に於いて哲學的領域は單に思索や解説ばかりでなく、藝術の方にも認めなければならぬ。實に、生に導かるゝ哲學的要求は、思索や解説で行き詰つた處を廣い意味の藝術で以つて補はねばならぬ。吾々の生きた自我は、この點迄要求して居るので、生の充實は一片の理屈や概念だけでは滿足出來ないのである。この原則を能く〳〵心

得て居ないと、教育上最も重大なる陶冶の本質には觸れて來ないから、詰り、不徹底なる結果しか得られないことになる。

自我の構成に對する見解——生の要求を中心として構成される自我の發達は何時でも、生活全體としての發達であるから、其の關係要素を極めて疎雜に區別すれば、生其のものゝ發達則と生に導かるゝ要求の發達則とに分類することが出來る。前者は、自然的法則であつて、後者は、人爲的法則である。自然的法則は、生物全體の共通的研究であつて自然科學の領域に屬し、自然的哲學に於いて其の終局を告ぐるのである。併し、この研究をどれ程進めた處が、其の結果を得る處の法則は、單に、事實に對する説明だけであつて、斯く〳〵のものであると云ふことだけの解釋である。

併し、教育と云ふ事實を取り扱ふには、勿論、斯う云ふ方面の研究も大切であつて、恰度、一軒の家屋を建てるためには、其れ〳〵の材料を其れ相當に仕揚げして、それから、建築の理法に叶つたやうに組み立てゝ始めて家屋が出來

すると同樣である。この意味に於いて、自我構成の一面である自然的法則を見出すための研究は、なくてならぬものである。さりとて、この方面許り何程やつた處が、各種の材料を集めたのみでは、建築が成立しないと同樣に、其の材料を適當に按配する其のものがなくてはならぬ。卑近な比喩を以てすれば、彼の建築に於ける棟梁の役目を果すものがなければならぬ。若しも、棟梁の役目を果すものがなければ建築が出來しないと同樣に、吾々の自我構成も、種々の材料を寄せ集めたものを統一し總合して行く働きがなければならぬのである。この方面の原理原則を指定するものは、卽ち、人爲妥當の法則であつて、規範の意味を持つたものである。詰り、吾々の自我を構成するためには、自然の約束としてこの二方面あることを忘れてならぬ。果たして、然らば、この二方面を統一して、發展する吾々の自我は、如何なる意味に於いて圓滿に統一して行くか、換言すれば、各〻、性質の異なる二樣の作用を如何にして統一するかの問題が出來する。

この問題に對して、根本的解決を與へようとすれば、何うしても、哲學上の問題に觸れなければならぬが、今は、左程、深入りする必要もないから、其の筋道だけを述べて、自我構成の原理を指摘しようと思ふ。

吾々が、研究の對象として、生きた自我を見るときは便宜上、前述の如く區別するが、併し、自我の實際的活動としては、自然的法則も人爲的法則も始終相交錯して有機的關係を營爲して居る。其れ故に、人爲的規範にも自然的要素もあるし、又、自然的法則だと云ふても、純然のものはあゝやう筈はないのである。最も、純自然ではなくして、其處に、尠なからず人爲妥當の法則が組織されて居は、純自然らしい形を以つて現はれる彼の生殖本能の如きものも、實る。勿論、一定の時期に現はれると云ふことは自然であるが、それが、各人の考へによつて、如何に處置するかと云ふことは最早人爲の法則觀念が附け加へられて居るのである。春期發動機に迄經驗した既得の人爲規範は、自然に現はるゝ生殖本能と同時に追從して來るから、純自然の領分は極めて狹隘となる。而し

ながら以上の如き論述だけでは、自然と人爲との領分爭ひだけで、自意識的自我活動としての融合歸一を說明したのではない。更に、吾々の意識的活動に移して、認識論的に考へて見る必要がある。吾々が、吾々以外の他の事象に對して、個體的實存の自我に客觀事物を取り入れる、卽ち捕捉する場合は、必らず先づ、事物の存在を認める。それは、單に、「在」と云ふ關係に於いて認めるのである。この「在」と云ふ判定は、取りも直さず、吾々の自然的要素換言すれば、自我の自然性を帶びた一要素と自我以外の他のものとの相交錯した事實上の云ひ表はしである。この關係は、實に、瀟洒たるもので、吾々の自我には、深入りした影響は勿論ないのである。けれども、吾々の自意識的自我活動は、斯くの如き瀟洒たる働き許りでなく、極めて、執拗に、厭く迄、自我の系統內に、捕捉しなければ止まぬと云ふ强烈なる一方相を持つて居る。この場合は、個體的自我の實存に映ずる其のものに對しては、單に、「在」だけの交錯では承知しない。其の意味を捕捉し、他の關係を極め、一から十迄取り調べをして、自分のものとしようと云ふ働きをなすのである。この場合の心的傾向、猶ほ總合的に云へば、自我の傾向は、「使在」と云ふ形に於いて働くものである。詰り、自我の實存に對して、其の價値を認めるのであるから、斯う云ふ働きになるのである。以上は、個體的實存の自我と、自我以外の他のものとの對立から云ふたのであるが、この考へを更に、個體的實存の自我其のものゝ中に引き入れて、考へても亦同樣の關係が成り立つのである。この、「使在」と云ふ考へがあればこそ、吾々の自我は發展の內容も、形式も、漸次擴大することになるのである。

然らば、この「使在」心の働き、卽ち、全自我の傾向は何處に、其の根據があるかと云ふに、それは、吾々の自我が、卽ち、生きて居ると云ふ、「生」其のものに伴ふ要求が判斷の形をとつて現はれたものである。約言すれば、吾々が、生きて居ると云ふことは、疑ひもなく自然である。けれども、それは形式上のことであつて、其の內容に立ち入つて見れば、自然を人爲化して、「生きたい」「斯うして生きたい」と云ふ人爲化の第一表徵が包容されて居る。其れ故に自我

自我の發達に關する見解

構成の原理は、何うしても、「生」の事實に對する內容から導かれるものである、若しも、この內容方面に於いて、「生きたい」、と云ふ、力がなかつたならば、それは、人間性を失ふ處のもので他の生物と何等異なる處はないである。

自我の發達に關する見解――自我の發達は、生其のものゝ發展であると換言することも出來る。其の根本的理由は、前述してあるが、更に、附言すれば、生の自然的過程を人爲的規範化して行く處に所謂自我の發達を認める事が出來るのである。

先づ、哺乳兒に於ける生活狀態を考へるならば、何等人爲的規範を來むることもなく、單に、「生」其のものを持續するために現はるゝ本能的活動である。併し、この場合とても、純粹なる自然ではなくして、微なる人爲の影響は認められる。勿論、其の當時、顯然と活動形式に現はれて居ると云ふのではないが、受胎した當時から既に捕捉した其の影響は、如何なる微細のものでも取り落すことなく、必ず蓄積して居るのである。當表現型が機關に相當しただけのことしか出來ないから、自然らしく見えるだけのことで、實は、人爲の影響が組織されて居る。

幼兒期になれば、茲に始めて、意識する自我と意識される自我の對立を認めることが出來る。詰り、目的觀念が確實になつて來る。例令、玩具を要求する場合に、他のものをやれば、中々承知しないと云ふやうな、一種の人爲的規範が出來てくる。併し、この場合とても、勿論、本能的、感覺的ではあるが、本能的活動の目的要素が感覺的經驗によつて或る程度まで啓發されて來たのである。けれども、未だ、精神的意味を悟ると云ふような狀態には至らぬので、それが、段々、進んで、小學校時代になれば、著しく發達して、從來、考へて居つた自我とは、其の面目を一新し、自分の物と他人の物との區別、或は比較等も判然すると同時に、自分の我執も强くなるし、又其の內省も明かになる。この場合の著しい特色は、自己評價と云ふことである。自分で、自分を評價すると云ふことである。教育の可能性は、この自己評價の現はれた時期から認めるこ

第一の自己評價

とが出來る。この評價樣式は、種々雜多であるが、生其のものゝ內容を組織する中心となるのであるから、教育的取り扱ひの場合は、實に重大なる意味を持つて居るものである。

自己評價の最初の現はれは、何でも、自分を偉いものにしようと云ふ企てであつて、若しも、他人に、惡口でも云はれたり、叱られでもすると、非常に失望落膽して居るものである。この心理的事實を實證するには、子供と馬鹿は、「おだてゝ使へ」と云ふことが能く說明して居ると思ふ。處が、小學校の三年から四年位になると、無意味に、おだてた處が、中々調子づいて來ないと云ふのは、自己評價の意味が、一學年二學年の幼稚な子供と餘程違つて來るからである。詰り、おだてを、おだてとして承知するからである。其れ故に、相當なる懲罰も必要であるし、又、忍耐、克己、と云ふやうな意志の鍛練も、或る程度迄强硬にやつても差し支へはない。若しも、この場合に、手緩にして、當、おだてゝ許り居て、子供の氣嫌を取るやうにして居れば、先生を馬鹿にする反面には、我が儘を增長せしめて、子供の性質は日一日と偏癖に傾くのである。斯くの如き傾向は、單に、一時的のものではなくして、子供の幼稚な頭腦には、先生から、仕向けられた仕業が、それでよい事と思ふし、又、其の仕業によつて、起つた精神狀態や、行ひの一々は、矢張り、正しいものであると思ふやうになるから、結局、子供に不良の自覺を與へるやうになるのである。斯う云ふ自覺を知らず識らずの間に組織して行く、其の過程は、是れ卽ち、永久的自覺を形成する過程とも見ることが出來るから、自己評價の發達しない時代の子供に對しては、教育者の態度、或は、取り扱ひは實に重大なる關係を有するものである。以上を概括すれば、子供自身は、子供當人の心に訴へて評價するだけで、他人と比較したり、或は、先生から訓戒された事例等と較べて評價するのでないから、詰り、主觀的自己評價と云ふことになるのである。更に、約言すれば、幼稚なる思想や感情は、子供當人の……生的要求……が强烈なるため、其の要求をば極めて自然的の形に於いて表現するから、其の幾分でも、自己の生

第二の自己評價

的要求を拘束するやうな場合は、其れに反抗するのである。併し、經驗的に得たる人爲法卽ち、子供が承知して居る程度より低いもの、卽ち、前に云ふた、おだてのようなものが、若し先生から仕向けられると、矢張り反抗を起すのである。

第二の自己評價……は、第一の自己評價よりも、自己の經驗內容が豐富になると同時に、理解能力も進歩するし、又、情緒的練磨も細密になるから、自他相互の關係を、單に、器械的物質的の意味ばかりではなく、多少精神的に考へるようになるのである。其れ故に、凡ての事物を見る態度も變るし、又、考へる態度も、直觀する樣式も、一變するのである。この時期の著しき特色は、自己內省の能力が際立つて現はれるのである。第一の自己評價時代は、よくても、わるくても、主觀の反抗を來たすのが特色であるが、この時代になると、先生から、過分の賞揚をうけると、自分で內省して、賞揚に値するか、どうかと云ふことを自ら考へる力が出て來る。若しも、不相應な賞揚であれば、自ら恥ぢて、一層奪發しようと云ふ心が出て來るし、又、よいことをしたにも拘らず、褒めてくれないと云ふやうな場合でも、自ら安ずると云ふ心持ちが現はれて居るから左程氣にしないのである。極言すれば、よくても、わるくても、先生の言によつて左右せられ、先生が褒めないからとか、褒めたからとか云ふような、客觀の標準よりも、自らの滿足、自分の出來、不出來と云ふことが中心となるのである。併し、第一の自己評價よりも、理解のある自己評價をするのであるから、先生の方で、子供の心を知らずに、先生の氣分を先きにして、子供を叱つたり、訓戒したりすると、子供は、口にこそ、彼れ是れ云はずに居るが、腹の中では、却つて、先生が理解のないことを笑つて居るのである。或る學校で、尋常　學年の男生が、何か、惡戲をしたので、受持の女教師が、職員室に連れ込んで、管々敷、說諭した其の揚句に、女教師は、男生に向ひ、あなたは、わるいと思ひませんか、と、訊問した。處が、其の男生は、曰く、わるいと思ひません、と、分明に答へた。事の是非は、別として、女教師が說諭し

た其の說明振りは男生の自己評價の中心には觸れて來ないのである。若しも、女教師の方から、聞かなければ、其の男生は、口に出して、わるいと思ひませんとは云はないが、返事を求めたから、仕方なしに、心中の儘を告白したので、男生の告白は、實に、自己評價の僞らざる聲なのである。是れは、一例に過ぎないが、四年から五年、六年位の兒童は、斯う云ふ狀態にあるのだから、教授者は、餘程注意しないと、兒童の心底に觸れることが出來ないと思ふ。

第一の自己評價は、社會化の要素が比較的尠なくて、人爲妥當の規範觀念が弱いから、自分の勝手氣儘に反抗もするが、この時期になると、學校は如何なものであるか、先生と生徒とは、如何なる關係であるか、と、云ふことの條理が、承知されて居るから、よしや理が非でも、先生に對しては、生徒は服從しなければならぬと云ふ規範觀念が形成されて居るから、表面上、誠に柔順であるけれども、兒童の心中には、社會的形式から組織された因襲的の規範であるから、其の規範は、詰り、僞りのものであつて、學校の門を出てゝしまへば、

心中から、全然取り去られてしまうのである。其の證據は、今の學校教育は、師弟の關係として誠に冷淡なもので、兎に角卒業してしまへば、其れで事足れりとして、何等の精神的交通も考へられないのである。其れ故に、この輕兆浮薄なる教育を革進するためには、何うしても、兒童の自己評價の狀態を充分に承知して、其の發達階段に相當するものを授けなくてはならぬ。

殊に、學校體操の如きは、極度に、精神的亢奮を催すものであるから、若しも、兒童の自己評價程度と一致しない教材を授けたり、或は、取り扱ひをすれば、忽ちにして、反抗を來し、或は、興味を節減し、甚しきは、學友に對しても喧嘩をしかけたり、種々の弊害を釀すことになるのである。吾人は、斯くの如き自己評價をば、假裝的自己評價と名づけるのである。

第三の自己評價……は、第二期に於ける假裝的要素は彌ゝ、多くなると同時に、又、生の要求が最も强烈になるので、一方は、社會的環境に順應しなければならぬ覺心もついて來るし、又、一方にては、自己の生的要求も滿足しなけ

れば止まぬと云ふやうな、力も現はれて來る。殊に、自然的なる人生の過程として、春期發動機に近づいて來るから、經驗內容が豐富となり表出形成は複となるから、自己評價の組織狀態は、第一、第二、の狀態よりも、稍〻不統一となるのである。第一、第二の場合は不完全ながらも、片一方に偏して居る代りに、力强き、捕捉もすれば、又、强烈なる表現もする。從つて、自己評價の決定も、中々、急速に仕揚げるのであるが、第三の自己評價は、何うかと云へば、中々、迷ひ易いので、果斷決行と云ふ、思ひ切つた評價は出來難いのである。

併し、一旦心の琴線に觸れると、隨分極端なことをもするので、詰り、自暴自棄と云ふやうなことをも、やりかねないのである。其れは、餘り複雜になつて居る自我の內包も外延も一時に統一し難いので、自ら決定するオーソリティーを見出しかね、蠢々として居るから、この點を見計つて、統一する中心點を示唆してやれば、忽ちに乘り氣になり、勇氣百倍と云ふ態度になるのである。

學校教育として最も困難なる時期は、この時代であつて、若しも、誤つて教育すれば、兒童の一身を那落に陷れるやうな不運に、導くものである。若しも、指導法宜しきを得れば、單に形式的に服從するのみではなく、兒童の心中から、湧き出した服從の行爲をなすのであるから、教育的生命は、永久に持續することになる。

以上は、極めて、簡單に、兒童の自己評價を中心とした、精神的活動の發達過程を概論したのであるが、偖、この發達過程に相應する學校體操としての取り扱ひは如何にすべきやと云ふ問題が出來する。

自己評價の發達と學校體操との關係……この問題についての具體的論述は、後章に述ぶるが、今は、兩者の關係を簡略に述ぶることに止める。

第一の自己評價は、主觀的、自然的要素が多いから、成るべく、自由を尊重して、嚴格なる體操を演ずる場合でも、其處に、自由の天地を見出し得るやうに、仕向けるのが肝腎である。例令、教師が、技術上の範を示して、新教授を

やるにしても、偖、其の矯正をやる場合等は、單に、器械的に、教師が手を下して矯正すると云ふよりも、自分自身に、其の不整なる事實を知らしめ、然る後に他の優良兒の技術を見せ、彌々、自分の技術は、他の人のよりも此の點がわるいと云ふことを自覺せしめて、其れから、教師が手を下して、矯正してやれば、よしや教師の方が、手ひどく直しても、決して、わるい氣は、起さぬのみならず、却つて、自分で直さうと云ふ反抗心が起つて、中々よい結果を得られるのである。要するに自分の行動について自覺せしむるのが肝腎の點である。

第二の自己評價の特色は、所謂、假裝的であるから、兒童のわるい點を指摘することが、大の禁物で、必ずよい點を公表して、時には、よいものだけを揃へて、模範を示したり、或は、教師が、よい點を指摘したり、美點を擧げて、惡い點をば、示唆的に止め、自ら悟るやうにして取り扱ふのが大切である。併し大體に於いて、わるい點を悟つたと思ふ場合には、今度は、積極的に、わるい兒童をどし〳〵矯正し、時には、口惜しがつて、泣く位迄も猛烈にやり出してもよい。斯う云ふ態度で、取り扱はないと、わるいものは、何時も、物蔭に隠れて居れば、事濟むと云ふやうな頗る陰險な考へを持たすやうになるから、自ら進んで、わるい點を直さうと云ふ自動的精神も出なければ、公明正大な精神も湧き出して來ない。要は、如何にして、技術の拙劣なる點、或は、自己の熱心の足りない點を、兒童自らに悟らせるかと云ふ處に、教師の苦心が存するのである。一旦、兒童が悟つてしまへば、身體的の矯正は勿論精神的指導も實に易々たるものである。

第三の自己評價は、冥想的自己評價と名づけてもよいと思ふが、實に、優柔不斷で、其の活動狀態が一體に緩漫であつて、身體運動の形式も一般に不整のものが多い。其れ故にこの時代の兒童に對しても、優良のものを褒めて、模範を示しても、亦、不良のものを一人々々やらしても、何等の效果はない。詰り、彼れ等は、彼れ等の複雜なる自己評價の標準があるから、全體の列生の前に出て模範を示す位の名譽は、あまりに單純で、到底精神全體の滿足を得るこ

とが出來ないのである。又、其の反對に、よしや、體操の技術が不良であつて、不名譽の所作をした處が、矢張り、精神的全般の滿足から云へば、些々たるもので、是れ又、何等の痛痒を感じないのである。其れ故に、第一の自己評價時代或は第二の評價時代とは、頓んと一變した取り扱ひをしなくてはならぬ。それには、先づ第一に、教授者の誠意を兒童に感せしめねばならぬ。教授者は、兒童の人格を尊重し、名譽を重じ、而かも、熱心に授ける態度を感せしめなければならぬのである。併し、是れを實際的事實として現はす場合には、教授者の技巧卽ち策略では駄目なので、徹頭徹尾眞精神を打ち込んでかゝらなければならぬ。斯う云ふ眞劍な精神から現はれる取り扱ひの事實は、先づ、體操演習中、技術の不整を矯正するにしても、其の不整なる兒童に對して靜かに矯正し、他の兒童には、成るべく氣のつかぬやうにすれば、比較的效果があるのである。比較的善良なる結果を得られると云ふことは、其の反面から云へば、兒童自らには、自己の缺點を自覺し、自ら進んで積極的に矯正しようと云ふ自動的精神が現はれた實證である。其の他詳しく論究すれば、數々あるけれども、第一、第二、第三の自己評價は、各〻特色あるから、其れに相應した取り扱ひをしなければならぬし、又、其の取り扱ひ上の中心點は如何に、自動的精神を喚起せしむるかと云ふことになるのである。約言すれば、如何にして、自律的に矯正し、自己活動の發展を進めて行くようにするかと云ふことになるのである。

兒童の活動性に對する見解

次は、兒童の活動性について少しく述べて見ようと思ふ。この問題は、他律的制約と自律的發展との結合を解決するための重大なる問題であるが、詳しい議論は略して、極めて實際的に考察したいと思ふ。

兒童の活動性に對する見解……兒童心理學の教ふる處に據れば、兒童の活動性の原始的なるものは、自動的であつて、それから、本能的となり、反射的活動やら、模擬的活動、或は、感情的、表象的と云ふやうに樣々の樣式を認めるのであるから、極めて簡略に以上六種の活動狀態を認めて、それが、如何なる